

14.5-17イ



\*1200501211420\*

北滿地方に於ける特産物の取引及採算

滿鐵調査課

(滿鐵調査資料 第四百十三編)



始





14.5-17

凡例

發行所寄贈本

一、「滿洲特産物の取引及採算」の題下に大豆及其製品たる豆粕及豆油に關する各地の實情を明かにすべく 第一編 各國に於ける需給狀況、第二編 大連、第三編 營口、第四

編 安東、第五編 滿鐵沿線地方、第六編 北滿地方の各編に分ち編纂中であるが本編

は其内第六編に相當するものである、右の内第一、三、四及五編は既に發刊を了し第二

編亦近く刊行の豫定である

一、擔當者課員加悦秀二

昭和五年十月



滿鐵調查課



# 北滿地方に於ける特産物の取引及採算

## 目次

第一章 大豆	一
第一節 出廻状況	一
第二節 東、南行採算比較	八
第三節 取引方法	二五
第一項 普通取引	二五
第二項 定期取引	二七
第四節 哈爾濱大洋票及黒龍江官帖	三〇
第二章 豆粕	三五
第一節 集散状況	三五
第二節 東、南行採算比較	三八
第三節 取引方法	四六
第三章 豆油	四九

目次

一



第一節 集散状況……………四九

第二節 東、南行採算比較……………五二

第三節 取引方法……………五九

第四章 油房……………六〇

第一節 油房の現状……………六〇

第二節 北滿油房と南滿油房との採算比較……………六二

# 北滿地方に於ける特産物の取引及採算

## 第一章 大豆

### 第一節 出廻状況

北滿農産物の輸移出は、主として 東支鐵道東部線又は南部線に依り其接續線たる烏鐵又は滿鐵を經由して爲されて居るが其内で大豆、豆粕及豆油は如何なる地位にあるかを知る爲めに、大正十四年以降各農産物の輸移出數量を比較するに

(一) 北滿農産物輸移出高品種別比較表 (單位米噸)

年	九月から翌年度	大豆		豆粕		豆油		計		其他		合計			
		數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合		
大正	一四年	一、六六八	六四	四、〇五八	一六	四、一〇六	二	二、七九四	八三	四、六六元	一八	二、六四三	〇五六	一〇〇	
昭和	元年	二、〇〇六	六〇	五、〇六〇	一九	五、一三三	二	三、六九〇	八七	四、一〇一	一三	三、〇五二	一四四	一〇〇	
同	二年	一、六六一	六二	五、〇九六	三〇	三、八〇三	一	二、三五一	七四	八三	四、四四七	一八	二、〇七九	一四四	一〇〇
同	三年	二、〇五九	六七	五、五一一	一七	四、八四四	一	二、六五九	七七	八五	五、九二二	一五	三、三三〇	一四〇	一〇〇

備考 (イ) 其他の内には小麦、麥粉、粳、高粱、粟其他豆類、穀類の一切を含む

(ロ) 本表數量は東支線東行及南行の合計

昭和三年に於て大豆は全體の六割七分、豆粕は一割七分、豆油は一分と云ふ割合となつて居るに依り、大豆及其製品は







備考 大豆及豆粕の發送高から到着高を差引いた殘數を以て出廻高と見做す但豆粕は大豆に還元して加算した還元歩合一、〇六五  
昭和三年に於て其出廻割合は、西部線四割、哈爾濱管區二割五分、南部線一割八分、東部線一割七分と成つて居るが、其内南部線と東部線とは、近年其出廻數量殆んど伯仲せるのみならず輸送距離の關係から大方前者は南行、後者は東行しつゝあるが、哈爾濱管區と西部線とは其地域が東行と南行の分岐點又は其以西にあり、而も其出廻は前二者に比し遙かに多量にして北滿出廻大豆全量の六、七割にも及んで居るに依り、此地方産大豆の嚮背は烏鐵及滿鐵の輸送數量に至大なる關係を及ぼすに到るものである。  
尙右北滿大豆出廻高を驛別に比較するに

(四) 北滿大豆出廻高驛別表(單位米噸、年次曆年)

驛名	昭和元年	昭和二年	昭和三年
西部地方	一四四	一、一八八	一、六三二
碾子山	一三、八二六	三五、七一七	二六、四二四
富拉爾	四七、五〇九	一二六、〇五五	一一三、六五九
昂々	九、五七三	四五、二〇九	八〇、〇〇一
小高	四六九、六四二	五六三、三九一	四二四、五一五
安達	一五、九四一	一一、六三三	一三、一五八
宋達	一四七、四六四	一六一、五二〇	一五一、四二二

東部地方	哈爾濱管區	計	對青	廟子	其他
成高子	六四三、九四七	七九〇、九一七	八九、一八四	六六、四九五	五五、七八一
阿什河	一七五	一、〇六三、二五六	二七、七三四	一九、三四六	八四、六三三
二層甸	二八、九〇一	六九五、一八五	六二五	九七八	二、七六七
小兒山	四九五				
帽兒山	六九〇				
小丸站	一〇、〇五一				
烏吉河	四、六五三				
烏吉河	九、九六二				
一吉河	八一、四五三				
魯克面	八四、三五八				
克沙窩	七、〇九四				
布沙河	七、〇〇八				
亞布路	一、九四二				
計	六四三、九四七	六九五、一八五	五九三、四六四	七九〇、九一七	九五三、九八〇



南部地方	計	石頭河子	石道河子	橫道河子	山子	海林市	牡丹江	愛河	磨石	穆稜	伊林	小城子	馬橋河	細河	小綏芬河	其
雙城堡	三三九、八一八	一、五一九	〇	一、七九四	三、八七六五	三三、八〇三	八五九	八五八	一、六六一	一、六四五	二、七一九	六、三四七	二、七七八	三、九	三、九	三、九
五姓屯	一、〇六四	二、二五五	二、二八八	二、二八八	四、三六三四	二、七五九六	一、〇九二	九、九四	一、二三四	九六三	三、八六九八	二、四九七	三、〇六八	三、六九二	三、六九二	三、六九二
三姓地方	五、四一一	八八〇	一一	一一	二、九九五	一、三〇九	一、四五八	二、三七一	一、八三三	五、二四九六	三、四八二	三、三三六	六、〇九四	一、四九一	一、四九一	一、四九一
雙城堡	一二〇、七〇七	七、七二六	七、七二六	七、七二六	七、七二六	七、七二六	七、七二六	七、七二六	七、七二六	七、七二六	七、七二六	七、七二六	七、七二六	七、七二六	七、七二六	七、七二六
計	三三九、八一八	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇
計	三三九、八一八	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇

蔡家溝	石頭城子	陶賴昭	松花江	老少溝	達家溝	蜜門	布爾津	哈爾濱	米子	其	計	合計
一一、八一	一七、八八六	二四、一七七	二九、七六一	三、二五五	一一、三八八	四八、五四一	四、五〇七	二、九〇二	二、六四〇	二〇	四二八、〇七〇	二、一〇一、七五二
一一、四〇三	一六三、九七五	一八、七三三	一八、四二六	二六三	八、三九六	五〇、七九六	三、二三五	五、四四五	三、二〇七	二八一	三六七、〇六〇	二、四九三、四六〇
一三、七四七	一七九、八一八	二一、四三八	一一、一四八	一、四七八	一一、〇一九	六三、四七八	三、七二九	四、八五六	五、六九〇	二、七八八	四三三、一八八	二、四〇三、八四七
計	四二八、〇七〇	三六七、〇六〇	四三三、一八八	二、一〇一、七五二	二、四九三、四六〇	二、四〇三、八四七	二、四〇三、八四七	二、四〇三、八四七	二、四〇三、八四七	二、四〇三、八四七	二、四〇三、八四七	二、四〇三、八四七

備考 豆粕は大豆に還元して加算した還元歩合一・〇六五

東支沿線中最も出廻多き驛は、哈爾濱管區と安達であつて、其出廻高は昭和三年に於て前者五九萬餘噸、後者四二萬餘噸にして其合計は北滿全出廻高の實に四割二分にも當り、之れを南滿第一の市場たる開原の出廻高二三萬餘噸に比すれば哈爾濱管區は其二、五倍安達は一、八倍にも及ぶ有様なるに依り、哈爾濱及安達は全滿洲を通じて最大の出廻市場なりと云へる、而も此外に後述の理由に依り西部線驛出廻の大豆中には直接東、南行せず、一應哈爾濱管區に入荷して



同地油房の原料となり、豆粕、豆油となつて積出されるものも相當に多い、従つて右の出廻數量に此西部線からの入荷數量を加算せば、哈爾濱管區に入荷する大豆は左表の如く年額實に九〇萬噸内外に及ぶ譯である。

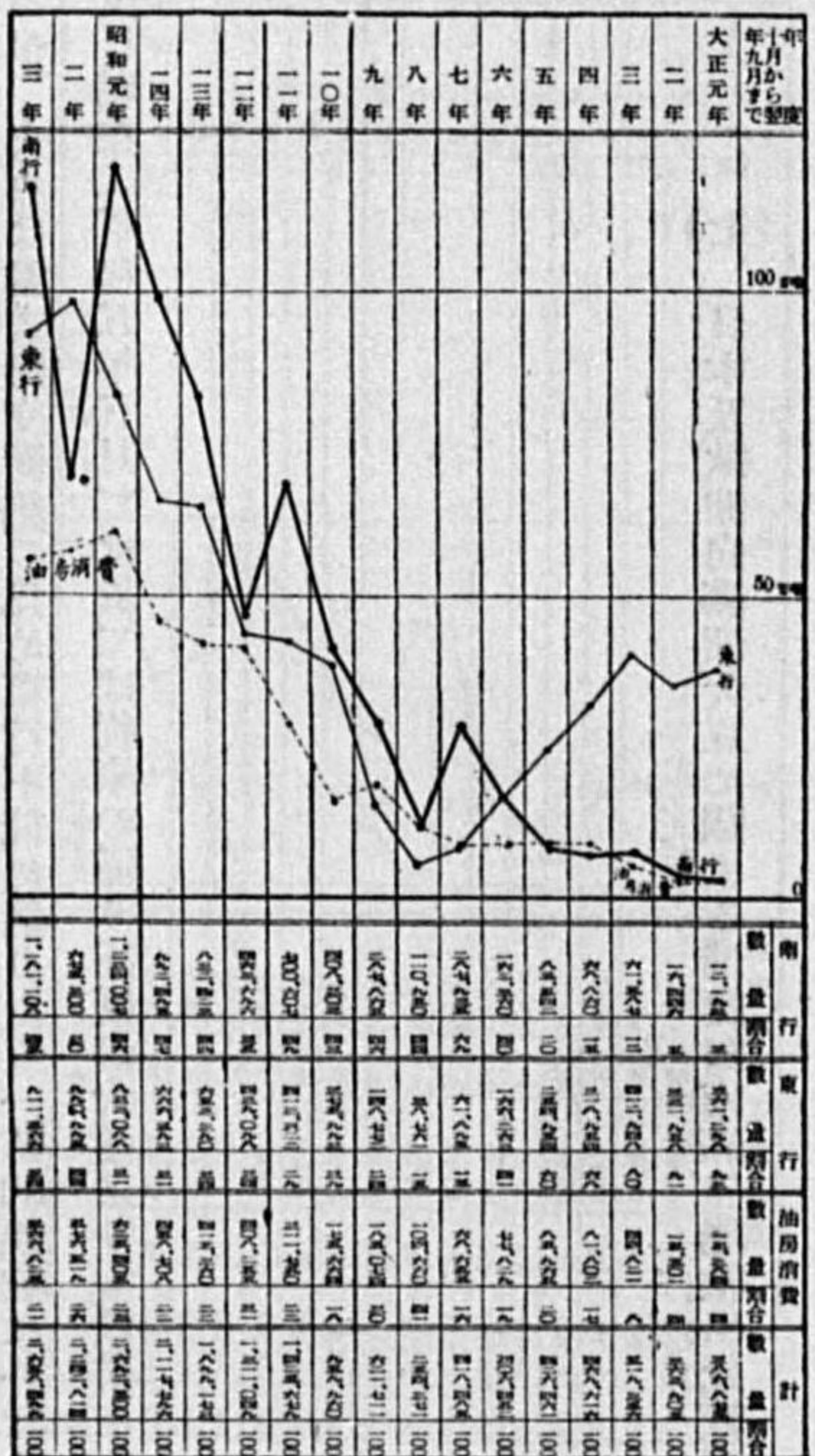
(五) 哈爾濱管區大豆入荷高表 (單位米噸)

年次(曆年)	東支沿線(主として西部線)より入荷するもの		其他の地方(呼海沿線、松花江沿岸其他)より入荷するもの		計		北滿總出する割合
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	
昭和元年	二二一、三三三	二五	六四三、九四七	七五	八五五、一七九	一〇〇	三九
同二年	二六一、三三九	二七	六九五、一八六	七三	九五六、五二五	一〇〇	三八
同三年	二八八、四一〇	三三	五九三、四六四	六七	八八一、八七四	一〇〇	三七

第二節 東、南行採算比較

北滿特産物東、南行の大勢は殆んど大豆の如何に依つて定まることは右述の如くであるが、北滿大豆は其外に東支沿線の油房で消化され、豆粕及豆油となつて東、南行するものがある、依つて先づ右大豆の東南行並油房消費高に就いて大正元年以降の數量を比較するに

(六) 北滿出廻大豆東、南行及油房消費高比較表 (單位米噸)

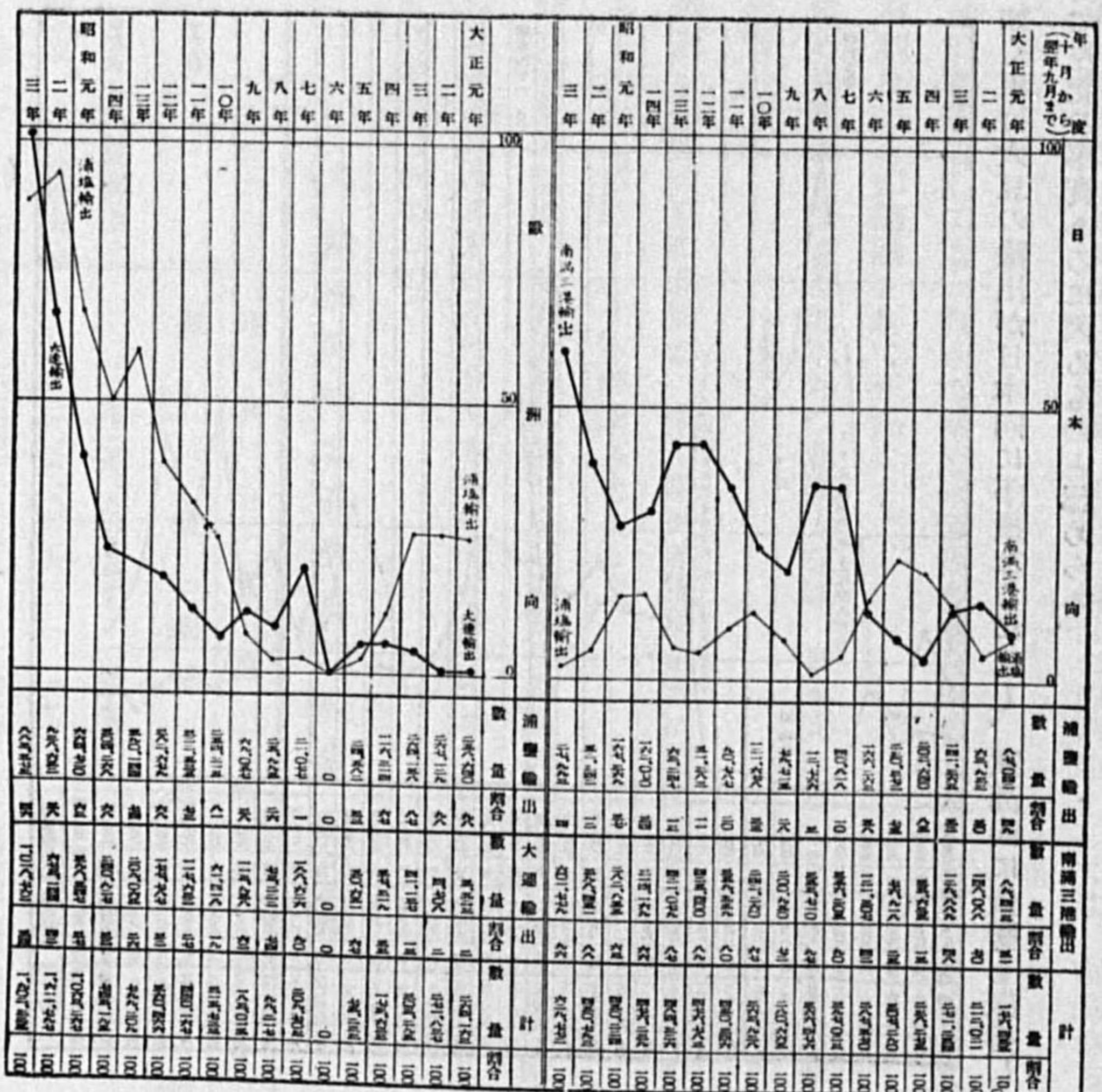


備考 東行は浦鹽の輸出高、南行は北滿から長春への到着高、油房消費は豆粕の浦鹽輸出高及長春到着高の和を大豆に還元したるもの、北滿の大豆は大正初年頃は東行が多く、南行及油房消費は殆んど云ふに足らぬものであつたが、其後歐洲大戰の勃發、露國の革命、露貨の慘落等に依つて北滿及浦鹽地方に於ける治安は混亂を極めた結果、東行は激減し南行及油房消費が増加した爲め、大正六七年頃から右の三者は殆んど相互に互角の勢となつた、然るに其後秩序恢復と共に東支及烏鐵の東行恢復政策と、滿鐵の南行維持政策との衝突となり、其角逐は益々熾烈となるに到つたものである、試みに昭和三年に於ける右三者の割合を比較するに南行四割五分に對し、東行三割四分、油房消費二割一分であつて、此三者の内では南行が最も多いが、右の内油房消費は製品となつてからは後述の理由に依つて大方東行しつゝあるに依り、之れを考慮に入れて比較すれば南行大豆は出廻大豆全體に對し未だ過半数に達せぬ譯である。



次に右三者の内油房消費だけは姑らく措き、大豆の東南行増減の原因如何を見るに、夫れは北滿で買附てから需要地へ運搬するまでの採算に於て、何れが有利となるかに因つて定まるものと云へる、併し東行大豆の輸出港たる浦鹽には南支那南洋及米國向に對しては定期船の便なく、而も此三地方の需要量は比較的多からず、大口の引合概して少き爲め此等地方向には東行大豆は現在尙殆んど輸送されず、唯南行大豆又は南滿産大豆のみが供給されて居る、依つて北滿大豆の此角逐は日本及歐洲向に對してのみ起るものと云へる、就ては右二地方向に對する東行大豆の地位を知る爲めに浦鹽輸出對南滿三港輸出の數量を比較するに第七表に示す如く昭和三年日本向輸出に於ては、南滿三港の九割六分に對し浦鹽は僅々四分に過ぎぬ有様であつて、浦鹽は近來極めて不振の状態にあるに反し歐洲向輸出に於ては浦鹽の方が大連(歐洲向に對しては安東及營口からの輸出皆無)よりも相當に多い、尤も昭和三年に於て大連は浦鹽よりも稍多量となつて居るが、夫れは露支國交斷絶の爲め東行不能に陥りたる一時的現象に外ならざるに依り、其原因の消滅と共に直ちに舊に復し現在(昭和五年五月)に於ては從來の通り浦鹽が大連よりも優勢となつて居ること第八表に明かなる通りである。

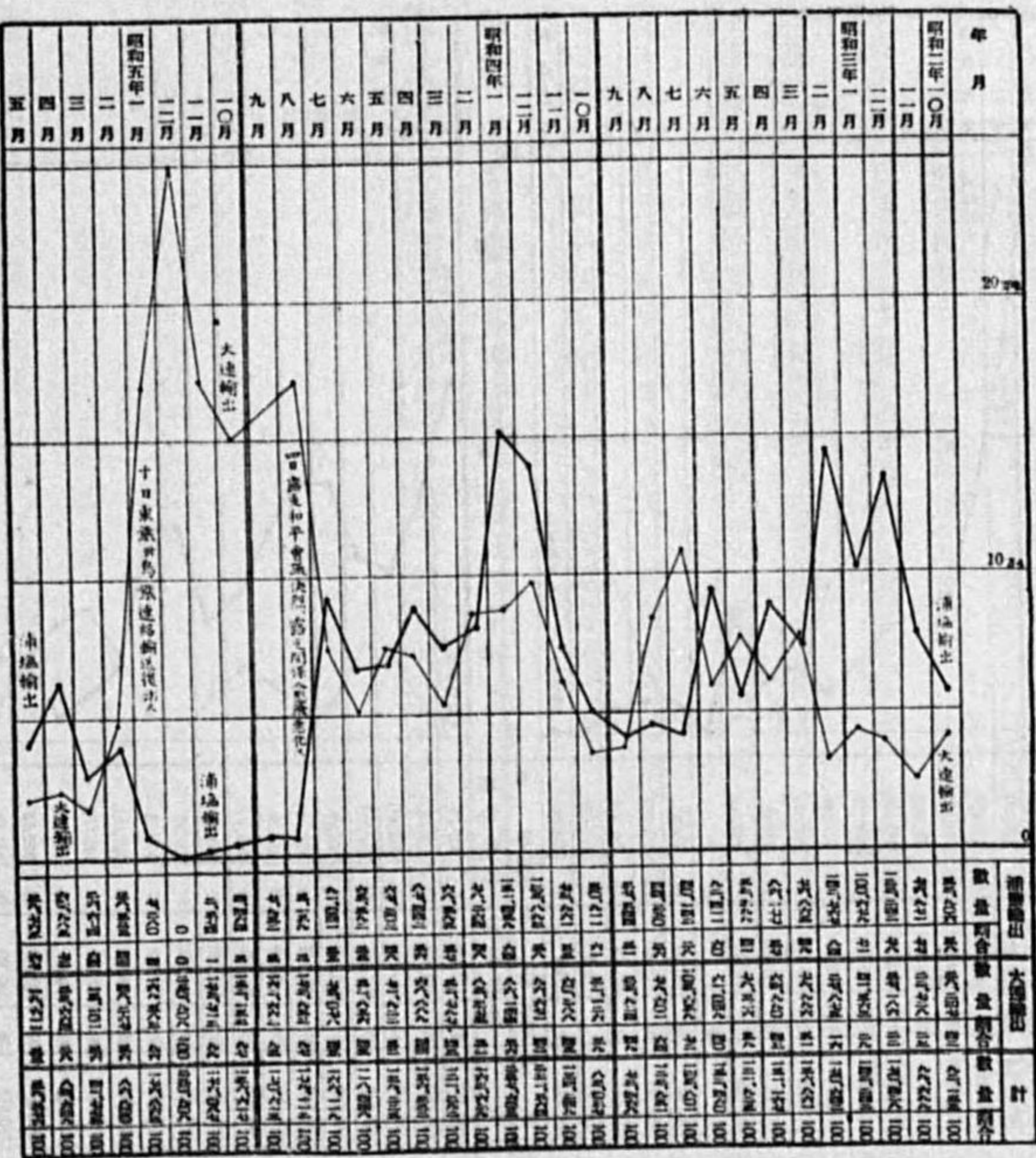
(七) 日本及歐洲向滿洲大豆に關する浦鹽對南滿三港輸出比較表 (單位米噸)



備考 歐洲向大豆は安東縣及營口から輸出されるものは皆無



(八) 歐洲向滿洲大豆に關する浦鹽輸出對大連輸出比較月別表 (單位米噸)



右の如く東行大豆の輸出が日本向に不振なるに反し、歐洲向に優勢を保持して居る理由は何ぞやと云ふに、夫れは大體に於て左記の事實あるに因るものと認めらる。

- (イ) 日本に需要される大豆の内豆腐、味噌、醬油の原料用としては、南滿地方にのみ産する白眉大豆其他が多く需要されつつあること。
- (ロ) 製油原料用としても、日本では近來滿鐵の混合保管大豆の方が、其他の大豆よりも概して品質優良にして、採算上結局有利なことが認識されて來たこと。
- 等の爲め滿鐵混合保管寄託以外の北滿大豆は、日本向に對しては何れの方面に於ても餘り歓迎されぬ傾向多きに反し歐洲向に對しては
- (イ) 滿鐵混合保管大豆の品質が、未だ歐洲の油房業者に諒解されて居らぬ爲め、品質の如何に拘らず成る可く値段の格安なるものを買付けんとする傾向多きこと。
- (ロ) 歐洲向滿洲大豆は、歐洲大戰以前から北滿在住の歐洲人の手に依り多く輸出されて居た爲め其輸出業者、東支及烏鐵の當局者及歐洲に於ける仲介業者等の間に多年極めて密接なる連繫あること

(九) 歐洲向南北滿大豆比較表 (單位米噸)

北滿大豆	昭和二年度		昭和三年度		平均	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合
浦鹽經由	九三八、六五二	五八	八八三、五七三	四六	九一一、一二二	五二
大連經由	三〇三、〇〇六	一九	六三〇、四六五	三四	四六六、七三六	二六
計	一、二四一、六五八	七七	一、五一四、〇三八	八〇	一、三七七、八四八	七八



第一章大豆

南滿大豆	三七〇、一三九	二三	三八八、二九七	二〇	三七九、二二八	二三
合計	一、六一一、七九七	一〇〇	一、九〇二、三三五	一〇〇	一、七五七、〇六六	一〇〇

備考 (イ) 北滿大豆の内浦鹽經由は浦鹽からの輸出高、大連經由は北滿から大連經由直送高  
 (ロ) 南滿大豆は滿洲總輸出高から北滿大豆輸出高を差引いたもの

歐洲の需要する滿洲大豆は最近二箇年間の平均に於て、其七割八分までは北滿大豆を以て充當されて居るが、此北滿大豆に對する歐洲向採算は左記に述ぶる如く、南行よりも東行が概して有利なるに依り之れが東行をして、南行よりも優勢ならしむる上に最も重大な原因となつて居る様である。

(十) 哈爾濱(定期)大豆歐洲向東、南行諸掛比較表 (大豆正味百斤當)

産地諸費	東行		南行		差額
	費目	金額	費目	金額	
口縫賃	一車哈大洋三八〇	金一、五五八	口縫賃	東行と同じ	
引換證發行料	〇・一〇	〇・〇〇六	引換證發行料		
買付口錢	九〇〇	五、〇〇元	買付口錢		
印自治費	〇・五〇	〇・三六	印自治費		
裝車費	七二〇	四、〇〇元	裝車費		

東支運賃	特別區損	東支運賃	特別區損
一延留〇・七三四一車金三、六七三	特別區損	一延留〇・七三四一車金三、六七三	特別區損
積込費	〇・八三	積込費	〇・七〇〇
商業代辦所費	〇・二四	商業代辦所費	〇・三〇〇
貨車引込料	〇・八二	貨車引込料	〇・八二
支線費	〇・三三	支線費	〇・三三
合計	三・八	合計	三・八

同附帶費	東支運賃	同附帶費	東支運賃
一延留〇・八三一車金五、七四三	一延留〇・七三四一車金三、六七三	一延留〇・七三四一車金三、六七三	一延留〇・七三四一車金三、六七三
積込費	〇・二四	積込費	〇・三〇〇
商業代辦所費	〇・八二	商業代辦所費	〇・八二
貨車引込料	〇・三三	貨車引込料	〇・三三
支線費	〇・三三	支線費	〇・三三
合計	六・七	合計	六・七







るが茲に特筆すべきことは北滿で最も出廻多き地方たる哈爾賓以西の西部線出廻大豆に對し東支及烏鐵が特に南行を阻止し東行を助長せしむべき政策を採用しつゝあることである、先づ東支沿線から聯絡南行する大豆に對する滿鐵大連着運賃を見るに百斤、一廳當一圓九七四厘であつて發驛の如何に拘らず絶對均一となつて居るが之れに反し東支及烏鐵は發驛の如何に依り又東、南行の如何に依り其賃率を政策的に加減して居るものである、試みに哈爾賓及西部線主要驛發大豆に對する百斤、一廳當東支烏鐵及滿鐵の東、南行運賃率を比較するに

(十一) 哈爾賓及西部線主要驛發東、南行大豆運賃率比較表 (百斤、一廳當)

驛名	滿鐵(南行)		東支南行		同東行		烏鐵(東行)	
	賃率	と哈爾賓の差	賃率	と哈爾賓の差	賃率	と哈爾賓の差	賃率	と哈爾賓の差
哈爾賓	一.九七四	0	三.三五	一.三七六	二.〇四二	一.七〇六	0	
廟臺	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
對青	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
滿溝	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
宋站	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
安達	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
薩南	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
喇嘛	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
小高	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	

驛名	滿鐵(南行)		東支南行		同東行		烏鐵(東行)	
	賃率	と哈爾賓の差	賃率	と哈爾賓の差	賃率	と哈爾賓の差	賃率	と哈爾賓の差
煙山	二.五七	0	二.五七	0	一.六八	〇.九一	一.六八	〇.一一一
昂溪	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
富基	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
虎爾	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
土爾	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
碾子	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

備考 (イ) 東支及烏鐵運賃の金票換算率は第一〇表(イ)に依る

(ロ) 「哈爾賓との差」中 (+)は哈爾賓に比して高 (-)は同安を示す

西部線發南行大豆に對しては東支は大體に於て所謂遠距離遞増法を採用し其百斤、一廳當運賃は遠距離程高率を課して居るに反し東行大豆に對しては東支は勿論烏鐵と雖も遠距離遞減法を以てし遠距離のもの程反對に低率と爲して居るに依り西部線からの南行大豆に對する東支運賃は哈爾賓よりも相當に割高となつて居るに拘らず東行大豆に對する運賃は何れも反對に哈爾賓よりも甚しく割安となつて居るものである、従つて哈爾賓大豆の歐洲向諸掛は東、南行の間に殆んど差違なきに反し西部線各驛發の大豆は右運賃の差額丈け南行よりも東行有利となつて居る、試みに右西部線各驛に就き大豆百斤當の東、南行運賃を算定比較するに

(十二) 哈爾賓及西部線主要驛發東、南行大豆運賃比較表 (大豆正味百斤當)



驛名	南行		東行		東南行		同哈爾濱比較
	支	計	支	計	支	計	
哈爾濱	〇、三四〇	一、一九一	〇、六八七	〇、九三八	〇、二五三	〇、二五三	(+)
廟臺	〇、三五九	一、二一〇	〇、六九四	〇、九四三	〇、二六七	〇、二六七	(+)
對青	〇、三九〇	一、二四一	〇、七〇六	〇、二四四	〇、二九一	〇、二九一	(+)
滿山	〇、四四五	一、二九六	〇、七三三	〇、二四一	〇、三二二	〇、三二二	(+)
宋溝	〇、四九六	一、三四七	〇、七六三	〇、三三九	〇、三四四	〇、三四四	(+)
安達	〇、五五一	一、四〇二	〇、七九〇	〇、三三六	〇、三七六	〇、三七六	(+)
薩圖	〇、六〇一	一、四五二	〇、七九八	〇、三三八	〇、四二六	〇、四二六	(+)
喇嘛甸	〇、六三六	一、四八七	〇、八〇三	〇、二二三	〇、四六一	〇、四六一	(+)
小蒿子	〇、六九一	一、五四二	〇、八一六	〇、二二一	〇、五一五	〇、五一五	(+)
煙筒屯	〇、七四二	一、五九三	〇、八二一	〇、二二一	〇、五六六	〇、五六六	(+)
昂溪	〇、七九六	一、六四七	〇、八三三	〇、二〇五	〇、六一九	〇、六一九	(+)
富拉基	〇、八二二	一、六六三	〇、八二五	〇、二〇三	〇、六三五	〇、六三五	(+)
虎爾湖	〇、八三一	一、六八二	〇、八二八	〇、二〇一	〇、六五三	〇、六五三	(+)
土爾池	〇、八八三	一、七三四	〇、八三四	〇、一九五	〇、七〇五	〇、七〇五	(+)
碾子山	〇、九三七	一、七八八	〇、八四〇	〇、一九〇	〇、七五八	〇、七五八	(+)

哈爾濱に比較して滿溝の運賃は六九厘、安達は二三厘、昂々溪は三六六厘、碾子山に到つては五〇五厘丈け有利と

なつて居るに依り此地方産の大豆が南行し難いのも無理からぬ譯である、今一例として西部線に於ける最大市場たる安達産大豆を採り、其大連驛着と浦鹽驛着との諸掛を哈爾濱産大豆と比較するに左記二表に明かなる如く南行に於ては安達は哈爾濱に比し一三九厘高となつて居るに對し東行に於ては其差は僅々三九厘に過ぎぬ有様である。

(三) 哈爾濱及安達大豆大連驛着諸掛採算比較表 (大豆正味百斤當)

費目	哈爾濱 (八區)		安達		差額
	金額	摘要	金額	摘要	
增斤代	買付斤量	一車 一、〇三三、五〇〇布度 四、三〇斤	買付斤量	一車 一、〇三三、五〇〇布度 四、三〇斤	
調整費	賣込斤量	” 一、七四八、〇六” 四、九〇〇”	賣込斤量	” 一、七四八、〇六” 四、九〇〇”	
	差斤量	” 三、〇九六” 三、八”	差斤量	” 七、六四四” 三、〇”	
混保手数料	百斤に付	金 三、〇五五 替金九、九三三	百斤に付	金 三、〇五五 替金九、九三三	
	調整費		混合費	一車哈洋 五、九五	金 三、三二
諸稅	印稅	一車留 一、四六六 金 一、五、三六二	官廠子料金	一車留 四、七〇	金 四、九二六
	輸出稅	一〇表參照 一車金 四、三六二	哈爾濱と同じ	一車大洋 一、五〇	金 四、三六二
輸稅	一車哈大洋 〇、三六	〇、三六	哈爾濱と同じ	一車大洋 一、五〇	〇、三六
官廠子料金	〇、三六	〇、三六	〇、三六	〇、三六	〇、三六
合計	〇	〇	〇	〇	〇
合計	〇	〇	〇	〇	〇







費目	哈爾濱(八區)		安達		金額	差額
	費目	金額	費目	金額		
增斤代	第三表に同じ	0.00	第三表に同じ	0.00	0.00	0.00
調整費	”	1	”	0.00	0.00	0.00
諸稅	”	2.00	第一〇表参照	0.00	0.00	0.00
包裝費	”	0.00	第三表に同じ	0.00	0.00	0.00
諸雜費	口縫賃 配列費 引換證發行料 買付口錢 大洋買付口錢 マーク刷込費	一車哈大洋 2.80 金 1.50 4.00 0.10 0.05 0.05 1.00 0.80 0.50 0.50	口縫賃 引換證發行料 買付口錢 大洋買付口錢 マーク刷込費	一車哈大洋 3.00 金 1.70 0.10 0.05 0.05 1.00 0.80 0.50 0.50	0.00	0.00
東支運賃	一應留 10.73	一車金 3.67	一應留 13.38	一車金 4.93	9.06	1.00
同附帶費	驛 積込費	0.83 0.24	驛 積込費	0.83 0.24	5.73 7.67	0.00
計		7.67		7.67	0.00	0.00

費目	哈爾濱(八區)		安達		金額	差額
	費目	金額	費目	金額		
烏鐵運賃	一應留公債 4.65 一車金 13.04	3.51	一應留公債 4.92 一車金 15.66	3.66	0.15	0.15
同附帶費	驛 費 哥 稅	0.83 0.15	驛 費 哥 稅	0.83 0.15	5.34 4.93	0.00
計		4.34		4.34	0.00	0.00
商業代辦所費	貨車引込料 支線費 通關手数料	0.83 0.13 0.50	通關手数料 積込費戻り	0.50 0.50	1.73 3.69 0.66 0.66	0.00
同附帶費	驛 費 哥 稅	0.83 0.15	驛 費 哥 稅	0.83 0.15	5.34 4.93	0.00
計		4.34		4.34	0.00	0.00

第三節 取引方法

第一項 普通取引

北滿大豆は左表に示す如く油房に消費されるものゝ外大部分は歐洲向輸出乃至滿鐵混合保管に振向られて居るものである其内滿鐵混合保管は東支沿線中左記

西部線 安達、宋站、蔡家溝、滿溝、對青山  
哈爾濱管區 八區



南部線 雙城堡、三岔河、陶賴昭、松花江、密門  
 各驛を以て受寄驛と定め滿鐵は一々検査人を派遣し検査を爲し東支をして受託せしめつゝあり、尙右以外の驛に於ける積出大豆に對しては到着混保の制度あり大連埠頭、長春其他の到着地に於て寄託可能である。

(五) 北滿大豆需要經路別表 (單位米噸)

徑路	昭和二年		昭和三年		平均
	數量	割合	數量	割合	
歐洲向輸出	一、二四一、六五八	五五	一、五一四、〇三八	五七	一、三七七、八四八
滿鐵混合保管寄託	二八五、七四七	一三	四三六、四五九	一七	三六一、一〇三
北滿油房消費	五七六、五一九	二六	五六六、八二五	二二	五七一、六七二
其他	一三八、八九〇	六	一四二、二七七	五	一四〇、五三四
計	二、二四二、八一四	一〇〇	二、六五九、四九九	一〇〇	二、四五一、一五七

備考

(イ) 北滿油房消費は豆粕の浦鹽輸出高と長春到着高との和を大豆に還元したもの  
 (ロ) 滿鐵混合保管寄託中には到着混保は不明に付算入せず  
 (ハ) 歐洲向輸出は浦鹽輸出高と滿鐵連絡直送高との和

此の地方に於ける取引は支那人間の小口引合に於ては舊來の支那式斗量に依り黑龍江官帖又は吉林官帖を以て多く爲され其方法は全體に於て南滿と同様であるが外商乃至邦商と支那人間の取引及支那人相互間の大口取引には多く露國式量目たる布度(一布度二七斤三〇一)に依り哈大洋票を以て爲されて居る、而して其取引單位は普通東、南行共一車と

なつて居るが南行の一車は南滿同様三〇噸(正味四九、〇〇〇斤一、七九四布度八〇六)なるに反し東行は貨車積載量に差違多く一定して居らぬ爲め普通一、〇〇〇布度(二七、〇八〇斤、一六廳三八一)を單位として取引されて居る併し實際に買付を爲す場合に於ては輸送中の欠斤等を見込む必要あるに依り右斤量に相當の増斤が爲さる、例へば哈爾濱に於ては南行一車の買付は一、八〇六布度八七五(四九、三二八斤)を以て慣例として居るが各地共其増斤量は大同小異である。

第二項 定期取引

南滿に於ては競賣買に依る所謂定期取引は邦人經營の取引所に殆んど限られて居る様であるが哈爾濱及安達には此種の取引市場として支那人經營の糧食交易所なるものがあつて大豆及小麥に對し右の定期取引が行はれて居る、併し夫れは元來大連取引所其他を模倣して設立されたものなるに依り其取引方法等も南滿邦人經營の夫れと餘り變りない様である、尤も其内安達の交易所は取引高も少く一般に餘り利用されて居らぬ様であるが哈爾濱の夫れは近來支那人間は勿論邦商乃至外商間にも利用せられ其市場にて發表する公定相場は北滿に於ける一般市況の指針として相當に信用を博して居る而して賣買單位其他は大體左記の通りである。

賣買單位 一、〇〇〇布度(二七、三〇一斤 一六廳三八一)

呼 值 一布度(二七斤三〇一)

建 值 哈大洋建

受渡場所 糧棧院內渡

受渡期口 毎月十五日



受渡最長限月 三箇月  
受渡標準品 隨年大路 (其年に出廻る大豆中の普通品質)

大連定期大豆の受渡品は滿鐵混合保管大豆であるが哈爾賓は右の如く隨年大路なるに依り哈爾賓の定期大豆を大連の市場に賣繋ぐことは品質に相違を生じ受渡不能に陥る惧あり特別の場合の外は此方法は餘り行はれて居らぬ様であるが哈爾賓の標準品は普通滿鐵混合保管大豆の二等乃至三等品位のものと思れば大過は無様である、今哈爾賓定期大豆を買付之れを大連取引所の混保二等品に賣繋ぐ場合を假定し其採算を比較するに左表に明かなる如く昭和五年五月二十日現在に於ては哈爾賓は大連よりも大豆百斤に付一〇錢二厘方割高となる、従つて之れを大連に賣繋ぐことは當日現在に於ては採算上寧ろ不利益なりと云へる。

(六) 哈爾賓定期大豆對大連定期大豆相場比較表 (昭和五年五月二十日現在)

費目	哈爾賓大豆六月十五日限		大連大豆混保二等品六月三十一日限		差額
	摘要	金額	摘要	金額	
大豆値段	裸一布度哈洋一元四八五替爲替五、六五錢替	三〇二五	麻袋込混保一等品百斤に付銀七圓、六〇格差五錢差引七、一一〇爲替六五、六五替	四六六八	
諸掛	左記明細表參照	一七四五			
計		四七七〇		四六六八	(+) 一〇二

右表 哈爾賓大豆諸掛内譯

費目	摘要	金額	費目	摘要	金額
增斤代	第一四表の通り	〇二二	東支運賃	第一四表の通り	一車 一六六・六二八
混保手数料	〃	〇三一	附帶費	〃	六三・〇四〇
諸税	〃	〇一七	計	〃	二二九・六七〇
包裝費	〃	二四一	滿鐵運賃	第一四表の通り	一車 四一七・〇〇〇
證據金々利	一車哈大洋四五〇元日歩二錢五厘 二七日間五五、六五錢替一車一六九一	〇〇三	長春積替費	〃	一五・八一〇
諸費	口縫賃第一四表の通り一車一・五五八 裝車費 〃 〃 四・〇〇六 混保配列費 〃 〃 三・八九六 混保證票 〃 〃 〇・〇五六 引換證發行料 〃 〃 〇・〇五六 買付口錢第一〇表の通り 〃 〃 五・〇〇九 大洋買付口錢 〃 〃 二・一六〇 馬車賃 〃 〃 一・九四八 計 〃 〃 一八・六八九	〇三八	大連取卸費	〃	五・四九〇
			計	〃	四三八・三〇〇
			定期賣込費	信託手数料銀一、三五錢六五、三〇錢替 特別手数料 〃 〃 〇・五〇〇 取引税 二、四〇〇圓と見て萬分の一 仲買手数料 〃 〃 〇・五〇〇 證據金々利 銀八〇圓日歩二錢二厘四一 日六五・三〇錢替 〃 〃 〇・四八三	二・八四五
			計	〃	〇〇六
			鈔票賣口錢	銀三、六〇〇圓金〇、〇〇一五替	五・四〇〇
			計	〃	〇一一



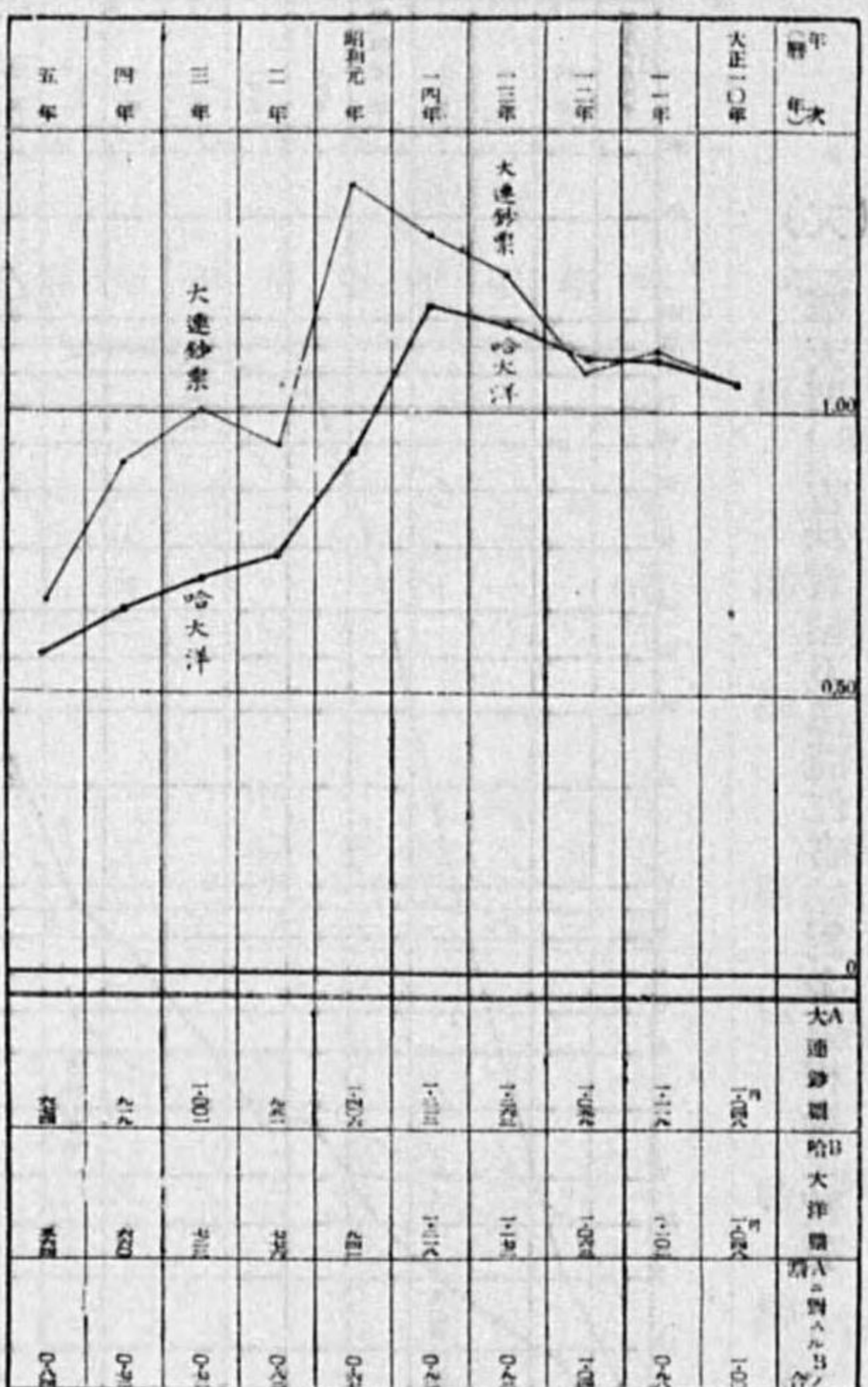
商品代金利	一、七〇〇圓と見て日歩二錢五厘				
一六日	”	六・八〇〇	〇一四	計	
					一七四五

### 第四節 哈爾濱大洋票及黑龍江官帖

北滿沿線に於ける大豆の大口取引は歐州大戰頃迄は多く露貨を以て爲されて居たものであるが帝政露西亞の没落に依り其貨幣としての機能が失墜するに到れる爲め之れに代位せしむべく支那官憲は大正八年末中國、交通兩行をして大洋錢を本位とする紙幣を發行せしめた、哈爾濱大洋票又は哈大洋と稱せらるゝものは即ち之れである、併し右兩行の外東三省官銀號、廣信公司及邊業銀行の三行に於ても其後右の發行權を受得したるに依り現在に於ては此發行權を有するものは併せて五行となつて居る。

此紙幣發行の當初に於ては發行銀行は何れも無制限兌換に應じたるに依り信用を博し殆んど銀、紙の間に開き無く從つて其相場騰落は大連鈔票と略々一致して居たものであるが其後現銀境外搬出禁止令の發布等あり爲めに事實上に於ては其兌換機能は剝奪されたと同様の状態に立到れる爲め其價格は現銀乃至大連鈔票との間に次第に開きを生ずるに到れること左表の通りである、尤も最近官憲の必死の努力に依り銀價の世界的大奔落の際にも拘らず割合に下落せず其價格は喰止められて居る様であるが無制限兌換の制度が再び復活せざる限り其前途は樂觀を許さぬものありと見るべきであらう。

(七) 大連鈔票及哈大洋票對金票相場比較表



備考 昭和五年は六月までの平均

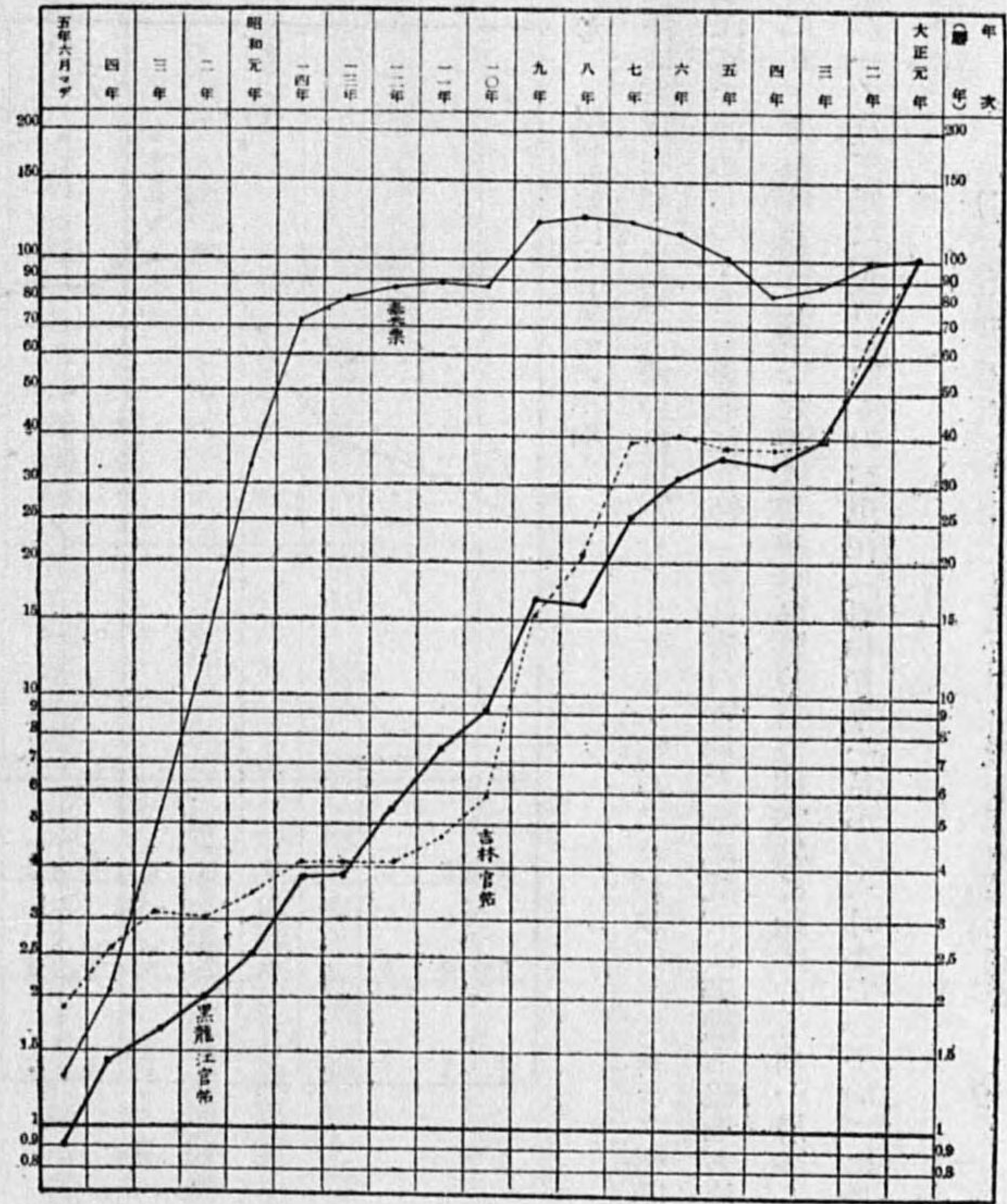
哈大洋は右述の如く近來下落の程度割合に大ならぬ爲め之れが取引上に及ぼす影響も現在の所左迄憂慮する程で無いが黑龍江省で流通しつゝある黑龍江官帖(吉林省の吉林官帖に就ては滿鐵沿線地方篇に記述したるに依り省略)は如何と云ふに其下落の度合は近來哈大洋は勿論奉天票乃至吉林官帖に比するも尙一層多く其價格の單位たる一吊文は大正元年金票の一六錢三厘に相當したものが現在(昭和五年一月から六月までの平均)に於ては僅々一厘四毛に當るに過ぎぬ有様である。

(六) 奉天票、吉林官帖及黑龍江官帖對金票相場比較表 (一)



曆年	年次	奉天		吉林		黑龍江	
		相場	票數	相場	官帖數	相場	官帖數
大正元年	一	〇、八三五	一、〇〇〇	〇、一八九	一、〇〇〇	〇、一六三	一、〇〇〇
二年	二	〇、八二一	〇、九八三	〇、一九八	〇、六五九	〇、〇九八	〇、六〇二
三年	三	〇、七二一	〇、八六四	〇、〇六七	〇、三七一	〇、〇六七	〇、三七二
四年	四	〇、六九四	〇、八三一	〇、〇六五	〇、三六一	〇、〇五二	〇、三二四
五年	五	〇、八四六	一、〇一三	〇、〇六七	〇、三七一	〇、〇五八	〇、三五六
六年	六	〇、九九一	一、一八六	〇、〇七三	〇、四〇二	〇、〇五一	〇、三一四
七年	七	一、〇三一	一、二三五	〇、〇六九	〇、三八〇	〇、〇四一	〇、二五四
八年	八	一、〇六九	一、二八〇	〇、〇三九	〇、二一九	〇、〇二六	〇、一六一
九年	九	一、〇〇九	一、二〇八	〇、〇二七	〇、一五三	〇、〇二七	〇、一六六
十年	一〇	〇、七四三	〇、八九〇	〇、〇一〇	〇、〇五九	〇、〇一五	〇、〇九三
十一年	一一	〇、七一九	〇、八六二	〇、〇〇八	〇、〇四六	〇、〇一二	〇、〇七五
十二年	一二	〇、六八三	〇、八一八	〇、〇〇七	〇、〇四一	〇、〇〇八	〇、〇四〇
十三年	一三	〇、五九四	〇、七二二	〇、〇〇七	〇、〇四一	〇、〇〇六	〇、〇三八
十四年	一四	〇、二七八	〇、三三四	〇、〇〇七	〇、〇四一	〇、〇〇六	〇、〇三八
十五年	一五	〇、二七八	〇、三三四	〇、〇〇六	〇、〇三四	〇、〇〇四	〇、〇二五
十六年	一六	〇、一〇四	〇、一二五	〇、〇〇五	〇、〇三〇	〇、〇〇三	〇、〇二〇
十七年	一七	〇、〇三九	〇、〇四八	〇、〇〇五	〇、〇三一	〇、〇〇二	〇、〇一七

(一) 奉天票、吉林官帖及黑龍江官帖對金票相場比較表 (二)





同 四 年	〇、〇一七六	〇、〇二一	〇、〇〇四八	〇、〇二六	〇、〇〇三三	〇、〇一四
同 五年 六月 まで	〇、〇一〇九	〇、〇一三	〇、〇〇三三	〇、〇一八	〇、〇〇一四	〇、〇〇九

此紙幣の發行銀行は黒龍江省政府の機關銀行たる廣信公司であるが同公司は紙幣發行乃至一般銀行業務の外省内樞要地に特産物に對する取引の機關を置き其紙幣を以て大豆其他の買占を爲さしめ紙幣亂發の手段と爲しつゝあることは奉天省に於ける官銀號の手口と同様であるが現在に於ては右述の如く其紙幣の價格が極度に暴落せるに依り其活動も餘り自由ならず買占の程度も餘程緩和されて來た様である、併し此地方は人口稀薄にして文化の程度も低く又通信、交通其他一般の取引機關も南滿に比すれば未だ甚しく幼稚なるに依り同公司は其間に處し官權の威力と特權とを振ひ特産取引上に今尙極めて優越なる地歩を占めて居る様である。

尙此外に特産取引上必要な貨幣として露國の本位貨幣たる所謂金貨留がある、東支及烏鐵の運賃は何れも此貨幣を單位として定められて居るものであるが此貨幣は現在實際に流通して居るものでない、依つて東支に於ては其法定平價（百留は日本金貨の一〇三圓二三錢）を基礎として十日目毎に哈大洋及金票に對する換算率を發表し之れに依り徵收を爲しつゝあり、又烏鐵は數年前までは右金貨留を本位とする露國々立銀行の紙幣たる所謂チエルウオネツツ留（知留）を以て徵收して居たものであるが其後金、紙の間に甚しき開きを生じ烏鐵は右の紙幣を以て徵收することは不利となりたるに依り自ら公債を發行し之れに依つて運賃を支拂はしめ其公債の賣出値段を紙幣の相場よりも引上ぐることに依つて其不利を或程度まで防止して居る様である、現在（昭和五年五月二十日）東支の百留は金票の一〇四圓六〇錢、烏鐵公債百留は九五圓七〇錢に相當して居るが日本の金解禁により金票の相場は略々安定せるに依り近來此爲替相場には大した變動はない様である。

## 第二章 豆粕

### 第一節 集散狀況

北滿に於ける豆粕の生産は大正初年頃までは殆んど云ふに足らぬものであつたが其後次第に累増し昭和三年に於ては五三萬餘噸、滿洲總生産高に對し三割四分を占め殆んど大連を凌駕せんとする勢となつたこと左表の通りである。

(元) 北滿に於ける豆粕生産高表 (單位米噸)

年 度	十 月 以 前 九 月 以 前	數 量	前 年 に 對 する 増 減 割 合	滿 洲 總 生 産 に 對 する 割 合		
				北 滿	大 連	其 他 計
大 正 元 年		一、二、五六七		一	四五	五四
同 二 年		一、四、五五五	〇、一五八	二	五六	四二
同 三 年		四、二、〇八五	一、八九一	四	五三	四三
同 四 年		七、六、八〇九	〇、八二五	八	六二	三〇
同 五 年		八、〇、七二八	〇、〇五一	七	五三	四〇
同 六 年		七、三、〇七九	〇、〇九五	六	七〇	二四
同 七 年		六、四、五五九	〇、一七一	五	五九	三六
同 八 年		九、八、二七二	〇、五三二	七	五九	三四
同 九 年		一、七、三、七七八	〇、七六一	一〇	六一	二九





第二章 豆 粕

同	同	昭	同	同	同	同	同
三	二	和	一	一	一	一	一
年	年	元	四	三	二	一	〇
年	年	年	年	年	年	年	年
五三三、二二〇	五四一、三三九	五八七、二三五	四三〇、七二二	三八八、一三一	三八三、三三八	二九二、七三三	一六四、九四三
△	△						△
〇、〇一七	〇、〇七八	〇、三六三	〇、一〇	〇、〇一三	〇、三一〇	〇、七五五	〇、〇五一
三四	三一	二六	二〇	二三	二三	一四	一〇
三九	四四	五五	四九	四八	五二	五二	五二
二七	二五	二〇	二五	二八	四〇	三四	三八
一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

備考 浦鹽輸出高及長春到着高の合計を以て生産高と見做す

前年に對する増減割合中無印は増△印は減

次に東支沿線中何れの地方の生産が最も多いかを知る爲めに各驛別に其數量を推算するに左記に示す如く最も多いのは哈爾濱管區、次ぎは安達と云ふ順であつて最近三箇年間に於ける其數量は生産全量に對し前者七割三分、後者一割六分に當り其他の地方の生産は残りの僅々一割一分を占むるに過ぎぬ有様である。

(三) 北滿に於ける豆粕生産高驛別表 (單位米噸)

西部地方	富拉爾基	昂々溪	昭和二年		昭和三年		昭和四年		平均	割合	合計
			數量	割合	數量	割合	數量	割合			
	六、七五二	二、〇三六	四、七六六	二、〇三六	四、五一八	二、〇三六	四、五一八	二、〇三六	四、五一八	二、〇三六	一
	一一、〇二九	二、〇五七	一九九〇五	二、〇五七	二二、六六三	二、〇五七	二二、六六三	二、〇五七	二二、六六三	二、〇五七	四

哈爾濱管區	計	東部地方				計	哈爾濱管區	計	南部地方	各驛	合計
		阿什河	一面坡	牡丹江	其他						
	一一三、八九五	一三、八八二	四、〇〇七	一一二	一、三三四	四〇二、四一五	一一三、八九五	八三	五五二、七三八	一一三、八九五	一三
	一三三、六七三	一四、〇〇八	四、二八七	一一、三三四	一、三五六	三八六、五四三	一三三、六七三	五〇九	五四〇、七〇〇	一三三、六七三	三
	一一六、九六〇	一六、〇八四	一、九一六	一、二三四	七六五	四一三、〇〇四	一一六、九六〇	二三	五四九、九八六	一一六、九六〇	三
	一二六、八四三	一四、六五八	三、四〇三	八九三	一、一五二	四〇〇、六五四	一二六、八四三	二〇五	五四七、八〇八	一二六、八四三	三
	七二	〇	〇	〇	〇	七二	七二			七二	六
	九六、七八三	九六、三二八	一〇、四〇〇	三、五五一	一一〇	九六、七八三	九六、三二八			九六、七八三	六

備考 (イ) 發送高より到着高を差引いた残高を以て生産高と見做す

(ロ) 年次は曆年

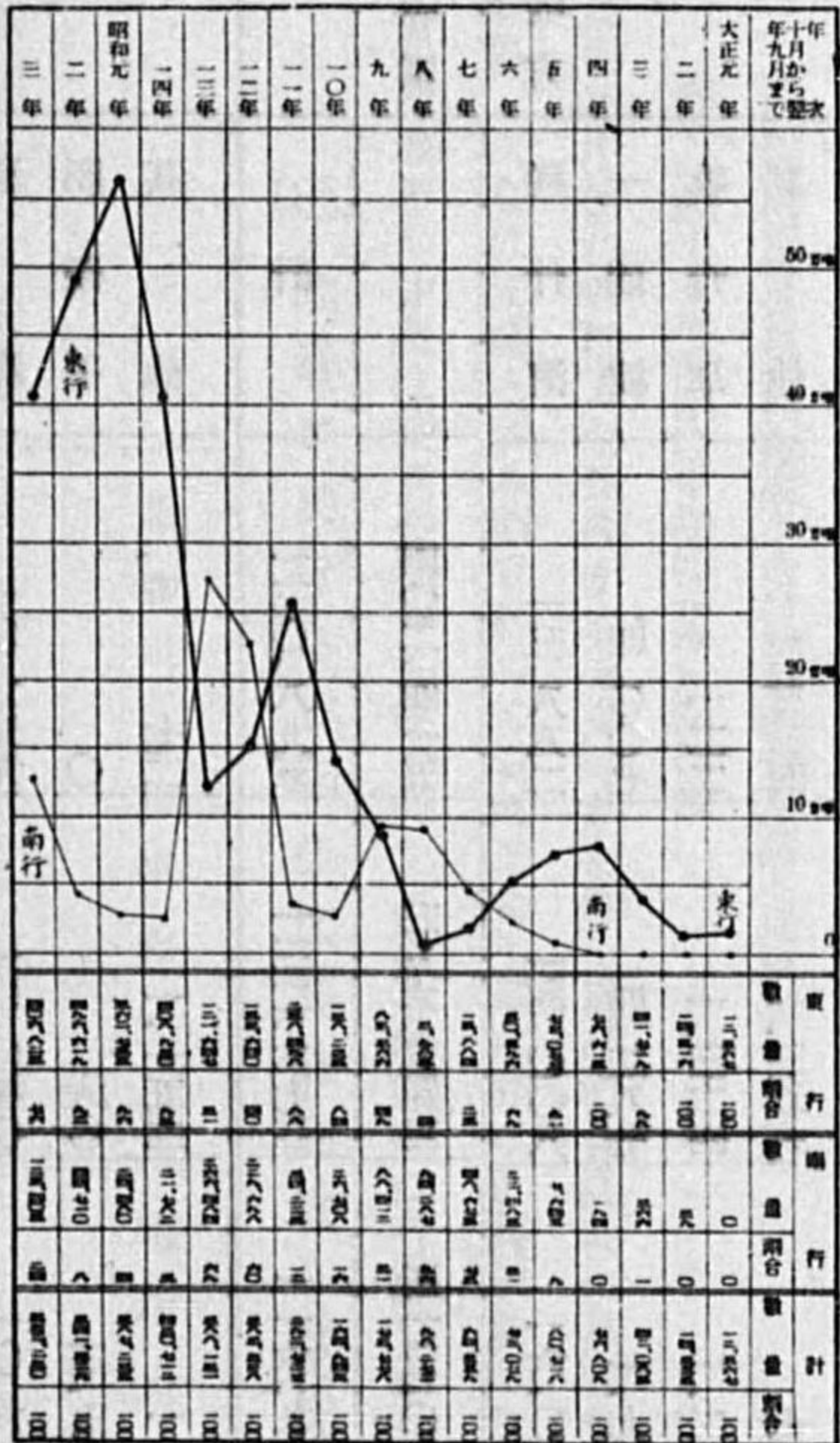
第二章 豆 粕



第二節 東、南行採算比較

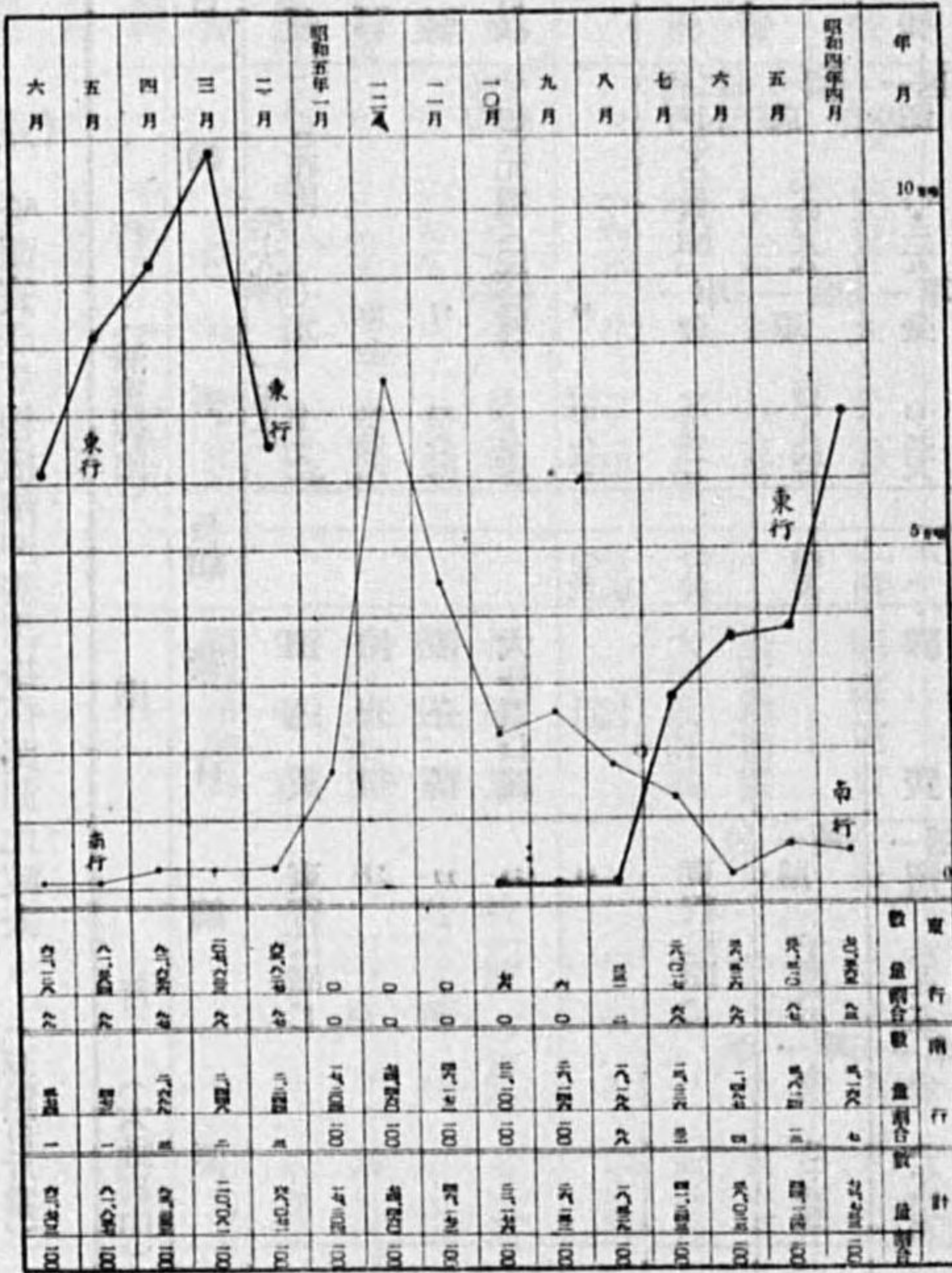
北滿豆粕東、南行の數量を比較するに左表に明かなる如く大正十三年頃までは相互に略々伯仲して居たが其後東行が俄然優勢となり昭和二年度に於ける東行は生産全量の九割二分を占むる有様である、尤も翌三年度は南行稍優勢を示して居るが夫れは第二二表に示す如く露支間の一時的紛争に依ること大豆の場合と同様である。

(三) 北滿産豆粕東、南行比較表 (單位米噸)



備考 東行は浦鹽輸出數量南行は東支發長春積數量

(三) 北滿産豆粕東、南行比較月別表 (單位米噸)



斯くの如く北滿豆粕は現在大部分東行しつゝあるが其理由は東行が南行よりも採算上甚しく割安となつて居る爲めである、試みに哈爾濱から日本向輸出の場合に於ける東、南行の採算を比較するに左表の通りである、但南滿に於ける大連以外の輸出港たる營口乃至安東は港内の水深浅く入港汽船に限度あるに依り歐洲向輸出の場合には殆んど荷役不可能で



第二章 豆 粕

四C

あるが之れに反し日本向の場合には必しも困難で無い、尤も其内安東は輸出諸掛高く大連に比し採算相当不利益なるに依り殆んど問題とならぬが營口は然らず其採算は可成り有利なるに依り南行に就いては大連と營口の二港から輸出する場合を採り比較した。

(三) 哈爾濱産豆粕横濱沖着諸掛徑路別比較表 (豆粕百斤當)

費目	東行 (浦鹽經由)		南行 (大連經由)		南行 (營口經由)		
	金額	摘要	金額	摘要	金額	摘要	
產地諸費	積込賃 二〇〇〇布度	哈大洋 一車金 七五三	積込賃	東行に同じ	積込賃	東行に同じ	
検査料	仲介料 一車金 三〇〇〇	三〇〇〇	仲介料	東行に同じ	仲介料	東行に同じ	
大洋買口錢	三三〇〇元買口錢替	一七六〇	大洋買口錢	東行に同じ	大洋買口錢	東行に同じ	
輸出税	百斤に付〇・五兩	車金 一八二七	東行に同じ	〇・五	東行に同じ	〇・五	
東支運費	留一廬	七四八八一車 二四〇・九四三	留一廬	二五〇〇〇一車 八〇四三	留一廬	大連に同じ	
同附帶費	驛 一廬	〇・三九一車金 七五八	驛 一廬	〇・九五一車金 二九四九	驛 一廬	大連に同じ	
積込費	〇・三五	八八六〇	積込費	〇・三五	二七九三	積込費	〇・三五
貨車引込料	〇・三五	九八六	貨車引込料	〇・三五	九八六	貨車引込料	〇・三五
支線費	〇・三三	三九三〇	支線費	〇・三三	三九三〇	支線費	〇・三三
計		一五九三	計		〇・三三	計	

埠頭費	烏鐵又は滿鐵運費		同附帶費		通關手数料
	公價	一廬	公價	一廬	
荷繰賃	一七〇〇〇一車金	五〇三四	荷繰賃	一枚七厘 一車金 七五〇〇	〇・四
看賃	〇〇六〇	一七九八	積込賃	一廬三三錢	〇・二
交通事務所費	〇・二五五	四四九五	船内人夫賃	二二錢	〇・二
商業部手数料	〇・二五五	四四九五	保管料	一五日間	二七五
噸稅	〇・六〇〇〇	一七六五	國際手数料	〇・一〇〇〇	一〇・〇〇〇
通關手数料	〇・一五五	四四九五	計		〇・四
船内人夫賃	〇・四三〇	一三〇八	荷繰賃	一枚七厘 一車金 七五〇〇	〇・四
船積手数料	〇・〇九〇	三〇八	積込賃	一廬三三錢	〇・二
保管料	〇・三〇〇	八九六〇	船内人夫賃	二二錢	〇・二
代辨料	〇・三三〇	三五六六	保管料	一五日間	二七五
計		二二九七四	國際手数料	〇・一〇〇〇	一〇・〇〇〇
		三三	計		〇・四
			荷繰賃	一枚七厘 一車金 七五〇〇	〇・四
			積込賃	一廬三三錢	〇・二
			船内人夫賃	二二錢	〇・二
			保管料	一五日間	二七五
			國際手数料	〇・一〇〇〇	一〇・〇〇〇
			計		〇・四
			荷繰賃	一枚七厘 一車金 七五〇〇	〇・四
			積込賃	一廬三三錢	〇・二
			船内人夫賃	二二錢	〇・二
			保管料	一五日間	二七五
			國際手数料	〇・一〇〇〇	一〇・〇〇〇
			計		〇・四

第二章 豆 粕

四一



船運賃	海保料上	合計	他港差と
百斤 一六錢	價格三、七〇錢 二七錢替	一三二	大連に比し 一三二 厘安 營口に比し 一四二 厘安
百斤 一六錢	價格三、七〇錢 一八錢替	一四八	浦鹽に比し 一三三 厘高 營口に比し 八九 厘高
百斤 一六錢	價格三、七〇錢 二七錢替	一三二	浦鹽に比し 一四二 厘高 大連に比し 八九 厘安

備考 豆粕一車は便宜上東、南行共三〇、八圓 一、一〇〇枚積と見做して算定した。

横濱沖着の諸掛に於て東行は大連經由に比すれば百斤に付二三一厘安、營口經由に比すれば一四二厘安となつて居るが斯くの如く諸掛に大差を生ずる所以は東支及烏鐵が豆粕の運賃を大豆よりも極度に引下げて居るに拘らず滿鐵は依然大豆と同一賃率を以てして居る爲めである。

更に大豆の例に慣ひ右の哈爾濱産豆粕の東、南行諸掛を安達産と比較すれば左記二表の通りである、南行に於ては安達は哈爾濱よりも一〇六厘高であるが東行に於ては僅々八厘高に過ぎず安達産豆粕の東行は哈爾濱よりも尙一層有利となつて居るが夫れは東支及烏鐵が西部線豆粕に對しても大豆同様南行に對しては遠距離遞増法を採用し東行に對しては同遞減法を以てし東行運賃を南行よりも有利ならしめて居る爲めに外ならぬ。

(四) 哈爾濱及安達産豆粕大連驛着諸掛比較表 (豆粕百斤當)

費目	哈爾濱		安達		差額
	費目	金額	費目	金額	
產地諸費	第三表に同じ	〇三三	哈爾濱に同じ	〇三三	〇
輸出税	”	〇三六	”	〇三六	〇
東支運賃	一廛留 三、五〇〇 一車金 八〇、四三二	一、五九	一廛留 四、五八一 一車金 一四七、五五三	二、九三	(一) 一、三三三
同附帶費	驛 費 一廛留 〇、九二五 一車金 二九、四七九 積込 費 〇、三六六 ” 二七、九三 貨車引込料 〇、〇五五 ” 九、八六 支線 費 〇、〇三三 ” 三、九〇 寬城子 ” 〇、二四〇 ” 七、四一〇 交通事務所費 〇、二七五 ” 八、八六〇 計 二、三三三 ” 七、二九七	二、四二	一廛留 一、六六六 ” 五、七五二	二、四四	(+) 〇、一五五
滿鐵運賃	一廛金 三、六六一 一車金 四六、三三〇	八、四六	哈爾濱に同じ	八、四六	〇
同附帶費	第三表に同じ	〇四三		〇四三	〇
計		一三、七		一三、三	(一) 〇、四



(三) 哈爾賓及安達達產豆粕浦鹽驛着諸掛比較表 (豆粕百斤當)

費目	哈爾賓		安達達		差額
	金額	費目	金額	費目	
產地諸費	〇三三	哈爾賓に同じ	〇三三	哈爾賓に同じ	〇
輸出税	〇三六	”	〇三六	”	〇
東支運賃	四六	一廛留 八〇七 一車金 二六〇 九九	四六	一廛留 八〇七 一車金 二六〇 九九	〇
同附帶費		驛費 一廛留 〇二九 一車金 七三六		驛費 一廛留 〇二九 一車金 七三六	
通關手續料	積込費	〇三五	積込費	〇三五	〇
	貨車引込料	〇三五	貨車引込料	〇三五	〇
	支線費	〇三三	支線費	〇三五	二
	計	一四一	計	一三九	二
烏鐵運賃	一六	一廛公債 二七五 一車金 八二五	一六	一廛公債 二七五 一車金 八二五	〇
同附帶費	〇四	哈爾賓に同じ	〇四	哈爾賓に同じ	〇
計	八六		八六		〇

右豆粕の運賃は然らば大豆に比較して何の位安くなつて居るかを一層明瞭ならしむる爲めに哈爾賓及安達達に就き百斤一廛當貨率を算定し之れを大豆と比較するに左表に示す如く東支は三割乃至五割三分安、烏鐵は三割二分乃至三割四分安となつて居る有様である。

(三) 哈爾賓及安達達東、南行大豆並豆粕百斤一廛當運賃率比較表

安達發	哈爾賓發		東支		烏鐵
	大 豆	同 割 合	大 豆	同 割 合	
大 豆	一、九七四	〇	一、三三二	二、〇四一	一、七四六
同 割 合	〇	〇	一、〇九〇	一、四二三	一、一四四
大 豆	一、九七四	〇	一、二二五	〇、六一八	〇、六〇二
同 割 合	〇	〇	五割三分安	三割安	三割四分安
大 豆	一、九七四	〇	二、四三二	一、八九七	一、六四一
同 割 合	〇	〇	一、二九五	一、二四四	一、一三二
大 豆	一、九七四	〇	二、四六五	一、八九七	一、六四一
同 割 合	〇	〇	四割七分安	三割四分安	三割二分安



次に滿鐵線の内大連と營口との運賃を比較するに百斤、一應當貨率に於ては右表に明かなる如く大連の一、九七四厘に對し營口は二、四六五厘となつて居るが營口は輸送距離に於て二二〇斤丈け近き地點にあるに依り豆粕百斤當運賃に於ては第二三表に示す如く大連の八四六厘に對し營口は七二七厘となり夫れ丈け安い、従つて其諸掛の合計に於ても營口は大連よりも百斤當八錢九厘見當有利となつて居る譯である。併し營口は

- (イ) 冬季結氷し十一月頃から翌年三月頃まで汽船荷役困難なること
- (ロ) 入港汽船少く船腹に限度あること
- (ハ) 大連には豆粕の定期市場あるに依り北滿の油房は市況の如何等に依り手持品を賣繋ぎ得る利便あるも此地にはなきこと

等諸種の缺點もあるに依り未だ左程利用されて居らぬ様である、試みに昭和四年四月から翌年三月に到る一箇年間（此期間は露支紛争に依り南行激増）に於ける東支發豆粕の大連及營口着數量を比較するに左記の如く大連の七割五分に對し營口は二割五分となつて居る。

大連 着	一七五、五五一米噸	割合〇、七五
營口 着	五九、一二六同	同 〇、二五
計	二三四、六七七同	同 一、〇〇

### 第三節 取引方法

前章に述べた如く北滿大豆は歐洲向が大部分を占めて居るが之れに反し豆粕は歐洲向は殆んど無く又輸送經路其他の

關係から南支那、米國等に對する積出も未だ殆んど皆無であり其大部分は日本丈けに仕向けられて居る、併し北滿の油房業者から直接日本に積出されるものは極めて少く多くは哈爾濱に於ける日本商人に買取られ其手を経て輸出されて居る、而も此地方に於ける豆粕は前述の如く其七割三分までは哈爾濱に於て製造されつゝあるのみならず沿線の油房と雖其殆んど全部は哈爾濱に取引員を派遣せるに依り其取引は大部分此地の日本商人と油房との間に經記と稱する仲買人の手を経て行はれて居る而して其取引單位其他は大體左記の通りである。

取引單位	東行は一、〇〇〇布度（五八九、六枚）
	南行は一貨車 三〇噸（一、一〇〇枚）
建 値	一枚に付哈大洋建
受渡場所	油房院内渡

此地方産豆粕一枚の重量及其品位は從來大連の夫れに比し概して劣等であつた爲め需要地たる日本に於ては大連よりも一枚に付二、三錢乃至夫れ以上割安と爲すにあらざれば取引不可能なる状態であつた計りでなく賣買業者間に品質上の紛擾も絶間なき有様であつたが昭和二年哈爾濱に於ける邦人取扱業者は油房業者と合議の結果國際運輸支店に豆粕の検査及引取機關を設置し買付の都度邦商は何れも此機關をして一々検査せしめ之れに合格したものに限り引取することに改めた結果其品質は著しく改善され近來其聲價は頓に高められて來た様である、尤も此地方の検査は滿鐵混保粕の夫れの如く不合格品となつた場合に於ける特別扱料の徴收及赤線乃至紫線の附加等の制裁を有せざるに依り必しも完全なる検査機關とは認められぬ様であるが

(イ) 大連油房其他の製品に對抗上其斤量及品質の統一を爲すことは取引上必須の條件であり斯くすることが結局北滿油



- 房關係業者全體の利益であると云ふことが油房業者にも徹底的に自覺されて來たこと。
- (ロ) 北滿豆粕は殆んど日本丈で需要されて居る爲め日本商人の共同検査機關により不合格品を製造したことを公表されることは甚しく其信用を毀損する結果となり將來に於ける製品の販賣上に不利を蒙むること多きこと。
- (ハ) 北滿油房の採算は南滿に比し後に述ぶる如く相當有利なるに依り斤量乃至品質上の拘束の如きは左程苦痛とならぬこと。
- 等の理由に依り右の検査は割合に嚴格而も圓滿に履行されて居る様である、尙現行検査規定に依る斤量は左記の通りであつて大連よりも北滿は一枚に付約〇、五斤増となつて居る而して其検査料は南行は一車(一、一〇〇枚)三圓、東行は一千布度(五八九、六枚)一五〇錢と云ふ規定である。

(七) 北滿豆粕對大連豆粕斤量規定比較表 (一枚當)

冬 季		北 滿 粕		熟 粕	温 粕	冷 粕
差	大 連 粕	斤 換 算	布 度			
〇、五二	四六斤五〇	二七疋九	一布二八哥九		一布二八哥四	一布二八哥一
			四七斤〇二		四六斤六八	四六斤四七
					二七疋七	二七疋六
					四六斤一七	四六斤
					〇、五一	〇、四七

夏 季		北 滿 粕		布 度
差	大 連 粕	斤 換 算	布 度	
〇、五〇	四七斤一	二八疋二	一布二九哥六	
			四七斤五〇	一布二九哥二
				四七斤二二
				四七斤〇二
				二七疋九
				四六斤五〇
				〇、五二

備考 北滿粕は九月二十一日から翌年六月二十日までを冬季とし其他を夏季とされて居るも大連粕は十月一日から翌年六月三十日までを冬季とし其他を夏季とされて居る。

### 第三章 豆 油

#### 第一節 集 散 狀 況

北滿産豆油の生産、輸移出及消費高を推算するに左表に明かなる如く生産豆油の内約三割が消費され残りの七割見當が他の地方に積出されて居る譯である。

(六) 北滿産豆油の生産、輸移出並消費高推算表



年 度	生 産		輸 移		出 消	
	数	量	数	量	数	量
大正一〇年	一八、四四五	一〇〇	一四、三三九	七八	四、二一六	二二
同 一一年	三三、七三四	一〇〇	二五、〇八三	七七	七、六五一	二二
同 一二年	四二、八六七	一〇〇	二七、一七一	六三	一五、六九六	三七
同 一三年	四三、四〇三	一〇〇	三九、五九六	九一	三、八〇七	九
同 一四年	四八、一六四	一〇〇	三五、九三八	七五	二、二二六	二五
昭和元年	六五、六六八	一〇〇	五三、六三〇	八二	二、〇三八	一八
同 二一年	六〇、五三四	一〇〇	三七、一〇八	六一	一三、四二六	三九
同 二二年	五九、五二七	一〇〇	四一、〇五二	六九	一八、四六五	三一

備考

生産は豆粕の浦鹽輸出及東支南下高の合計を豆油に換算したもの

(ハ)×(ロ)×(イ) 輸移出は豆油の浦鹽輸出及東支南下高との合計

生産から輸移出を差引いた残高を以て消費高と見做す

次に東支沿線各驛別發着高を比較するに左表に示す如く昭和三年に於て發送の方が多しのは哈爾濱管區、安達及阿什河丈けであつて其他は反對に到着の方が却つて多く過去數年間大體に於て大差は無い、従つて北滿で豆油の供給餘力を有する地方は右の三地方丈けであつて其他は寧ろ其需要地であると云へる譯である。

(元) 東支沿線各驛に於ける豆油發送又は到着超過高表 (單位米噸)

年 度	西部地方		哈爾濱管區		東部地方		南部地方		合 計
	富拉爾基	昂達溪	計	阿什河	一面坡	牡丹江	其他	各驛	
大正一二年	△ 二六	△ 二四五	△ 四〇二	△ 二九二	△ 一一四	△ 八三	△ 四二六	△ 一〇〇	△ 一五、八三二
大正一三年	△ 七	△ 七四	△ 二、九二〇	△ 一三一	△ 二六四	△ 五二	△ 二四九	△ 一九八	△ 三七、三二一
大正一四年	△ 一四	△ 七七	△ 三、一二七	△ 九	△ 一七	△ 一一五	△ 三六九	△ 五〇二	△ 三七、三二六
昭和元年	四八三	三五三	六、九四三	四一八	九四	一四〇	五二九	△ 三四五	△ 四四、二〇七
昭和二年	五六三	八一四	一〇、二二一	一、〇一九	一四一	一六〇	八二四	△ 一〇六	△ 四八、一四〇
昭和三年	七五	五〇	六、三六〇	二八、一四〇	△ 五七	△ 二四六	△ 一、〇三	△ 四九五	△ 三三、四三〇



備考 年次は曆年、無印は發送超過、△は到着超過

第二節 東、南行採算比較

北滿豆油の東、南行輸出數量を比較するに昭和二年頃までは東行が多く其後は南行が多い即ち左表の通りである。  
(三) 北滿豆油東行、南行比較表

年 度 (十月から翌年九月まで)	東 行 (浦鹽輸出)		南 行 (東支線南下)		計
	數	割 合	數	割 合	
大正一〇年	一二、八八〇	九〇	一、四四八	一〇	一四、三二八
同 一一年	一八、八五三	七五	六、三三〇	二五	二五、〇八三
同 一二年	二六、五八〇	九八	五九一	二	二七、一七一
同 一三年	三八、一六六	九六	一、四三〇	四	三九、五九六
同 一四年	三四、二三五	九五	一、七〇三	五	三五、九三八
昭和元年	四九、二五三	九二	四、三七七	八	五三、六三〇
同 二 年	一三、一四二	六二	一三、九六一	三八	三七、一〇三
同 三 年	二、二四五	五	三八、八〇七	九五	四一、〇五二
同 四 年	△ 五、七二四	一二	△ 四三、六三五	八八	四九、三五九
計					
差 額					

備考 △印昭和四年度は五年六月までの數量

近年南行の方が右の如く優勢となつたのは然らば如何なる理由に基くものであるかを知る爲めに前例に依り哈爾濱及安達産豆油の歐洲向東南行諸掛を比較するに

(三) 哈爾濱産豆油歐洲向東、南行諸掛比較表 (豆油百斤當)

費 目	東 行		南 行		差 額
	費 目	金額	費 目	金額	
産地諸費	積込費	金 二六六五	積込費	東行に同じ	
	仲介口錢	二七〇〇	仲介口錢	二七〇〇	
	積込立會料	九〇〇	積込立會料	九〇〇	
	組合費	〇、二〇〇	組合費	〇、二〇〇	
	自治税	五、〇〇元	自治税	五、〇〇元	
	大洋買口錢	八〇〇	大洋買口錢	八〇〇	
計		一三、〇〇〇		一三、〇〇〇	〇
東支運賃	一廬金留三、六六三	一、五九二	一廬金留二、六六三	一、〇六六	(+) 五二六
同附帶費	驛 費	〇、三二五	驛 費	〇、九二五	
	支線費	〇、六一〇	支線費	〇、六一〇	
	商業代辦所費	〇、四八〇	同(寛城子)	〇、三三〇	
	ボクラ通關料	〇、五五〇	商業代辦所費	〇、四八〇	
第三章 豆 油		一、五八三		一、三二七	五三







(ロ) 烏鐵の荷線賃は夏と冬により賃率を異にし夏は四月一日から九月十五日まで冬は九月十六日から翌年三月三十一日まで

(三) 安達産豆油歐洲向東、南行諸掛比較表 (豆油百斤當)

費目	東 行		南 行		差 額
	費目	金額	費目	金額	
產地諸費	積込費	哈爾濱に同じ 一車金 六六五	東行に同じ		
	仲介口錢	" 一七〇〇〇			
	積込立會料	" 九〇〇〇			
	大洋買口錢	" 八〇〇〇			
計		三〇六五五			〇
東支運賃	一 金留 三三九六七	一 車金 六九四三三	一 金留 三〇六	一 車金 五四八〇	二九八
同附帶費	驛 費	〇.三〇五 一車金 九三九	驛 費	〇.九二五 一車金 二六三〇	
	ボクヲ通關	" 〇.五五〇〇 一五八二	交通事務所費	" 〇.二五五 七九二	
	貨車特別	" 一軒東支一車金留〇.七五浦鹽ま	貨車特別	" 一軒東支一車金留〇.七五長春ま	
	裝置料	七二八三	裝置料	二二〇一七	
計		九六八三三		三三三五八	六三二四五
滿鐵又は烏鐵運賃	一 金留 四四〇六	一 車金 二七五五六	二 七五 滿鐵運賃	哈爾濱に同じ	八四
					(+) 〇九
合計					(-) 五七

同附帶費	輸出稅	埠頭費	船運賃	海上保險料	缺斤	合計
哈爾濱に同じ	"	"	"	"	"	〇.三
		夏 (多)				〇.三
		冬 (多)				〇.三
			一 四〇〇	〇.六	一 五〇	四 三三六
						(多) 四七九
			"	"	"	〇.三
			"	"	"	〇.三
			"	"	"	〇.三
			一 四〇〇	〇.六	一 五〇	四 四七三
		夏 (+)				(-) 〇九
		冬 (+)				(-) 〇九
						〇.三
						〇.三

哈爾濱産豆油は東行の方が南行よりも豆油百斤に付一二厘乃至六五厘高く僅少ながら南行有利となつて居るが安達産豆油は南行の方が東行よりも寧ろ九四厘乃至一四七厘高く東行有利となつて居る、安達が哈爾濱よりも斯くの如く東行有利となる理由は大豆及豆粕の夫れと同様東支及烏鐵が西部線發豆油に對し南行を阻止し東行を助長せしむべき政策を行ひつゝあるに因るものである、依つて哈爾濱産豆油は兎に角安達産豆油は東行の方が優勢となるべき理であるが第三〇表に明かなる如く東行は近來割合に不振の様である併し之れは大體左記の理由あるに因るものと認めらる。

(イ) 豆油は大豆、豆粕等よりも値段遙かに高き爲め其諸掛に於ける九錢乃至一四錢位の相違は採算上左程の影響となら



(ロ) 東行豆油に對し昭和五年一月頃まで五割の輸出附加税（百斤に付〇、一五〇兩）が徴收された爲め東行は南行よりも現在以上に不利であつたこと。

(ハ) 浦鹽は既述の如く日本及歐洲向輸出丈けに利用されて居るものであるが豆油は元來日本には殆んど仕向られず又歐洲向に對しても近年比較的不振であつたため其東行の機會は割合に少かつたこと。

次に豆粕の例に慣ひ豆油に對する東支、烏鐵及滿鐵の百斤一匁當運賃率を比較するに豆粕と異なり豆油は大豆に比し相當に高い即ち左表に明かなる如く哈爾濱からの東支南行運賃の如き大豆に比し二〇割八分高に及ぶ有様である。

(三) 哈爾濱及安達産東、南行大豆並豆油百斤一匁當運賃率比較表

大 豆	哈 爾 濱 發		滿 鐵		東 支		烏 鐵
	同 割 合	差	豆 油	大 豆	南 行	東 行	
一、九七四	〇	〇	一、九七四	一、九七四匁	二、三三五匁	二、〇四一匁	一、七四六匁
二、四三二	二〇割八分高	四、八一	七、二二六	二、〇四一匁	二、一七五	四、二二六	一、九三七
一、八九七	一〇割七分高	一、七九〇	三、六八七	一、八九七	一、八九七	一、八九七	一、八九七
一、六四一	一割一分高	〇、二八四	一、八二五	一、六四一	一、六四一	一、六四一	一、六四一

同 割 合	安 達 發	
	差	豆 油
〇	〇	一、九七四
一四割高	三、四一五	五、八四六
九割四分高	一、七九〇	三、六八七
一割一分高	〇、二八四	一、八二五

第三節 取引方法

支那人間に於ける豆油の取引は大體南滿の夫れと大差は無い様であるが邦商乃至外商と支那人間に行はるゝ取引慣習は

- 一、取引單位 一 車
- 但東行一車は一三、七五匁内外にして南行一車は二七、五匁内外
- 一、建 値 一、〇〇〇布度（二七、三〇一斤）に付哈大洋建
- 一、受渡場所 油房院内渡

大體右の通りであるが其取引は殆んど哈爾濱に於ける經紀と稱する仲買人の手を経て行はるゝ、而して邦商に於ては之れが検査及引取に際しては何れも國際運輸をして當らしめ品質の統一と改善に資し併せて買手共同の利益を擁護しつつあること豆粕と同様である。



### 第四章 油房

#### 第一節 油房の現状

満洲の油房を大連油房、北満油房及其他油房に區別し其原料大豆消費高を比較するに左表に明かなる如く大正元年度に於ては大連油房四割五分其他油房五割四分北満油房一分の割合であつて北満油房は殆んど云ふに足らぬものであつたが其後の發展目覺しく昭和四年度に於ては大連油房四割二分其他油房二割一分に對し北満油房は三割七分を占むるに至つたが此數量には撒粕、板粕及粉碎粕（丸粕を粉碎し飼料用に振向らるゝもの）油房に於ける原料大豆消費高をも包含せるに依り此等特殊粕を除き丸粕の儘で賣出されるものの消費高丈けに就き比較するに同年度に於て大連油房の消費高五九九、九六三噸に對し北満油房は五九八、九九〇噸であつて其差僅かに九七三噸に過ぎず北満油房は正に大連油房を凌駕せんとする勢にある。

(一) 満洲所在油房に於ける原料大豆消費高地方別表（單位米噸）

年	大連油房		北満油房		其他油房		計	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
大正元年	四〇六、八七三	四〇	一三、六四四	一	四八、〇九五	四	一、〇〇、六六六	一〇〇
同 二年	四四三、六六六	四三	一五、五〇〇	一	四九、〇四九	四	一、〇〇、六六六	一〇〇
同 三年	六三二、九五八	五三	四四、八三三	四	四九、〇四九	四	一、一六、三四七	一〇〇
(十月から翌年九月まで)								
同 四年	一、〇六五、三〇三	六二	一八、〇〇四	一	五〇、一七二	四	一、七三、六六八	一〇〇
同 五年	八五五、二七四	五九	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 六年	九一九、四四五	五九	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 七年	九四一、七二〇	五七	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 八年	一、〇六五、三〇三	六二	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 九年	九三二、九二六	五五	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 一〇年	一、四三三、五〇八	五三	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 一一年	八九一、三四五	四六	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 一二年	九〇三、三三七	四六	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 一三年	一、二七五、七九	四九	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 一四年	一、三九八、八五五	五〇	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
昭和元年	八八、二八八	四	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 二年	六四六、六四三	四	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 三年	五九、九六三	三	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
昭和四年	九五、九六五	三	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
昭和四年(十月から六月まで)	六九五、九四八	四	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
計								
丸粕油房	五九、九六三	三	五九、九六三	一	五九、九六三	三	一、五七、七四	一〇〇
其他油房	九五、九六五	三	一九、五五八	一	〇	〇	一、五五、四三	一〇〇
計	六九五、九四八	四	六八、五二八	三	五九、九六三	三	一、七三、二四七	一〇〇

年	大連油房		北満油房		其他油房		計	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
大正元年	四〇六、八七三	四〇	一三、六四四	一	四八、〇九五	四	一、〇〇、六六六	一〇〇
同 二年	四四三、六六六	四三	一五、五〇〇	一	四九、〇四九	四	一、〇〇、六六六	一〇〇
同 三年	六三二、九五八	五三	四四、八三三	四	四九、〇四九	四	一、一六、三四七	一〇〇
(十月から翌年九月まで)								
同 四年	一、〇六五、三〇三	六二	一八、〇〇四	一	五〇、一七二	四	一、七三、六六八	一〇〇
同 五年	八五五、二七四	五九	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 六年	九一九、四四五	五九	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 七年	九四一、七二〇	五七	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 八年	一、〇六五、三〇三	六二	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 九年	九三二、九二六	五五	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 一〇年	一、四三三、五〇八	五三	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 一一年	八九一、三四五	四六	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 一二年	九〇三、三三七	四六	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 一三年	一、二七五、七九	四九	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 一四年	一、三九八、八五五	五〇	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
昭和元年	八八、二八八	四	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 二年	六四六、六四三	四	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
同 三年	五九、九六三	三	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
昭和四年	九五、九六五	三	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
昭和四年(十月から六月まで)	六九五、九四八	四	一七、五、六四	一	四九、六九六	四	一、七九、六六六	一〇〇
計								
丸粕油房	五九、九六三	三	五九、九六三	一	五九、九六三	三	一、五七、七四	一〇〇
其他油房	九五、九六五	三	一九、五五八	一	〇	〇	一、五五、四三	一〇〇
計	六九五、九四八	四	六八、五二八	三	五九、九六三	三	一、七三、二四七	一〇〇

(イ) 大連、浦鹽、營口及安東輸出豆粕數量を大豆に還元したものを以て原料大豆總消費高と見做す。  
 (ロ) 大連油房の數量は豆粕輸移出高から到着高を差引いた殘高、北満油房の數量は豆粕浦鹽輸出入高と東支南下高との合計を夫れ



夫れ大豆に還元したもの。

(=)(ハ) 原料大豆總消費高から大連及北滿油房消費高を差引いたものを以て其他油房消費高と見做す。  
丸粕油房の還元歩合一、〇六五其他油房の還元歩合一、二五〇但昭和三年度以前は丸粕油房と其他油房との區分困難に付何れも丸粕油房の還元歩合一、〇六五を以て換算した。

北滿油房が近年極めて顯著なる發展を爲しつゝあることは右の通りであるが茲に注目すべきことは北滿の油房は殆んど哈爾濱と安達とに集中して居ると云ふことである。即ち第二〇表に指摘した如く北滿全油房にて生産される豆粕の内哈爾濱の生産は最近三箇年間の平均に於て七割三分、安達は一割六分を占めて居る有様である。

### 第二節 北滿油房と南滿油房との採算比較

右述の如く北滿特に哈爾濱油房の發展は近來特に顯著であるが夫れは北滿油房の採算が他の地方に比して有利なる爲めであると云へる、就ては其採算を明かならしむる爲めに先づ哈爾濱と大連との例を採り比較するに製造費に於ては大體左表の通りであつて哈爾濱油房は大連より大豆百斤當二錢一厘方高く夫れ丈け採算不利となつて居る。

(三) 大連油房對哈爾濱油房生産費比較表 (大豆百斤當)

工 賃	費 目	大 連 油 房		哈 爾 濱 油 房		差 額
		摘 要	金 額	摘 要	金 額	
一日原料消費七六四、 二四擔所要人員四九人 百斤當〇、〇六四		日 給	四 一 錢	日 給	五 一 錢	〇三三 (-)〇〇七
			〇二六		〇三四	(-)〇〇四
					〇二五	(-)〇一〇
					〇四〇	〇
					一三三	(-)〇二二
			一四〇		一五二	(-)〇二二
			二七二		二九二	(-)〇二二

動 力	油 草	其 他	計	間 接 費
撫順粉炭百斤當〇、〇〇四五	香港草〇・五斤			事務所費 償却費 〇、一〇〇〇 〇、〇四〇
一噸 一一圓〇五錢	百斤 二圓九〇錢	〇四〇	一三三	一四〇
〇五〇	〇二五	〇四〇	一三三	一四〇
一噸 一二圓〇〇錢	百斤 五圓〇〇錢	〇四〇	一五二	一四〇
〇五四	〇二五	〇四〇	一五二	一四〇
(-)〇〇四	(-)〇一〇	〇	(-)〇二二	〇

備考 原料消費量、職工所要人員並動力及油草所要量は兩地共同量と見做す。

尤も工場の製造費は規模の大小經營の良否等に依り左右さるゝこと多く一概に比較困難であるが此種丸粕油房の如く機械力を應用すること少く勞力に頼ること多き所謂手工業類似のものにありては其規模の大小の如きは殆んど問題とならぬ様である、依つて右の比較は大體に於て大過無き見込である、但其内工賃は職工の種類其他に依り可成りの相違あり相當複雑なるを以て左記に依り算定した。

(六) 大連油房對哈爾濱油房職工賃銀比較表



平均一人	計	職名	員數	摘要	大連油房		哈爾濱油房	
					一人當月	同上金建	一人當月	同上金建
		抱梁的	四人	食給料	七、五三〇	四、二八七	八、五八七	四、三〇六
		打錘的	八	食給料	七、四三〇	四、〇三三	八、四八七	四、九四〇
		打雜的	一四	食給料	七、八五五	四、四六三	一四、〇八七	四、七九四
		雜役	八	食給料	七、七五〇	四、四〇六	八、八〇〇	四、九四二
		機械係	八	食給料	九、四三〇	四、七七四	一〇、〇八八	四、九一三
		原料係其他	七	食給料	七、七五〇	四、四〇六	八、八〇〇	四、九一三
		出來高拂	製一箇月豆粕 四、八〇枚	小洋七、〇〇	同上金換算 三、七九	一七、七三七	哈洋七、〇〇	同上金換算 三、九〇
計	四九				六〇〇、五五	〇、四一		七四六、七二
平均一人								〇、五一

次に製造費以外の諸掛如何を見る爲めに哈爾濱大豆を買付て製造し其製品の内豆粕は横濱向、豆油は歐洲向に積出す場合を假定し兩地油房の採算を比較するに左表に示す如く哈爾濱油房は産地諸費、包装費及鐵道運賃に於て大連より

も割安となり其外埠頭費、船運賃、海上保險料等は哈爾濱の方が寧ろ不利となつて居る、而して哈爾濱は特に鐵道運賃に於て大豆百斤當實に四〇三厘安となつて居るに依り結局大連に比し二三〇厘方採算有利となる有様である。

(三) 哈爾濱大豆を原料とする大連油房對哈爾濱油房採算比較表 (大豆百斤當)

費目	大連油房		哈爾濱油房		差額
	金額	摘要	金額	摘要	
產地諸費					
買付口錢	二〇〇金	連絡一車哈洋	九〇金	連絡一車哈洋	
口縫賃	二八〇	一五五	二八〇	一五五	
引換證發行料	〇・一〇	〇・〇六	〇・一〇	〇・〇六	
印稅	〇・五〇	〇・三六	〇・五〇	〇・三六	
自治費	三九〇	三二〇	三九〇	三二〇	
貨車積賃	七〇〇	四〇七	七〇〇	四〇七	
特別區捐	一〇〇〇	六〇〇	一〇〇〇	六〇〇	
麻袋運搬賃	〇・〇六	〇・三三	〇・〇六	〇・三三	
配列費	四〇〇	三三七	四〇〇	三三七	
マーク刷込賃	一〇〇	〇・五五	一〇〇	〇・五五	
馬車賃	一〇五	五八〇	一〇五	五八〇	
計	二六七三	〇九	二六七三	〇九	
包裝費					
麻袋買入費	二五五〇金	連絡一車	七錢替金	二四五〇	
麻袋償却費		一車五枚			
計					〇六 (+)



製造費	第三五表の通り	二七二	第三五表の通り	二九三
鐵道運費	東支運賃 百斤に付 金 〇・四〇		豆粕(東行) 積込賃其他 百斤に付 金 〇・〇一一	
	同附帶費 " " 〇・二九		東支運賃 " " 〇・四六六	
	滿鐵運賃 " " 〇・八五一		同附帶費 " " 〇・〇四四	
	同附帶費 " " 〇・〇四三		烏鐵運賃 " " 〇・一四四	
	取卸賃共 百斤に付 " " 〇・〇四三		同附帶費 " " 〇・〇四三	
			計 〇・七九 九四斤に付 金 〇・七三三	
			豆油(南行) 積込賃其他 百斤に付 金 〇・〇〇七	
			東支運賃 " " 一・〇一六	
			同附帶費 " " 〇・〇〇一	
			滿鐵運賃 " " 〇・八三四	
			同附帶費 " " 〇・〇四三	
			計 三・二七二 二〇五斤に付 金 〇・三六	
				九六〇
				(+)
				〇二二
				(-)
				〇九〇
				(+)
				〇九〇

埠頭費	豆粕 荷練賃 連絡一車金 七七〇	〇四七	豆粕(東行) 百斤に付 金 〇・三二 九四斤に付 金 〇・三〇八	三二七
	積込賃 " " 一〇・二四		豆油(南行) 百斤に付 金 〇・八三 一〇五斤に付 〇・〇一八	(-)
	船内人夫賃 " " 六七六			一七六
	計 " " 二四六〇	〇四七		
輸出税	豆油 百斤に付 金 〇・五〇 九四斤に付 〇・四七	〇四七	大連油房と同じ	三二七
	豆粕 百斤に付 金 〇・〇六 九四斤に付 〇・〇三	〇四七		(-)
船運賃	豆油 百斤に付 金 〇・二〇 九四斤に付 〇・一〇	〇四七		〇
	豆粕 百斤に付 金 〇・二〇 九四斤に付 〇・一〇	〇四七		
	豆油 百斤に付 金 一・一五 一〇五斤に付 〇・二五	〇四七		〇四七
				(-)
				〇四七



計	海上保険料		豆油		豆粕(東行)		豆粕(南行)	
	百斤に付	金	百斤に付	金	百斤に付	金	百斤に付	金
	豆油	0.003	豆油	0.002	豆粕(東行)	0.010	豆粕(南行)	0.002
	百斤に付	0.006	百斤に付	0.004	百斤に付	0.006	百斤に付	0.002
	豆油	0.003	豆油	0.002	豆粕(東行)	0.010	豆粕(南行)	0.002
	百斤に付	0.006	百斤に付	0.004	百斤に付	0.006	百斤に付	0.002
計	0.006	0.012	0.004	0.008	0.010	0.006	0.002	0.002
計	0.012	0.024	0.008	0.016	0.010	0.006	0.002	0.002

備考 (イ) 諸掛の内容に就いては第一〇、二三及三一表参照  
 (ロ) 豆粕は横濱沖着豆油は歐洲着までの諸掛

尙茲に特筆すべきことは哈爾濱油房は後述の理由に依り哈爾濱産大豆を使用せず西部線産大豆を使用するに於ては其採算は尙一層有利となると云ふことである、試みに西部線中最も出廻多き安達産大豆を原料に使用する場合は採り前例に依り哈爾濱大連油房の採算を比較するに左表に示す如く其差は二七八厘となり哈爾濱産大豆を原料とする場合よりも更に四八厘方哈爾濱油房に有利となる状態である。

(元) 安達産大豆を原料とする大連油房對哈爾濱油房採算比較表 (大豆百斤當)

費目	大連油房		哈爾濱油房		差額
	金額	摘要	金額	摘要	
産地諸費	0.001	買付口錢 連絡一車 哈洋	0.001	買付口錢 連絡一車	
	0.001	口縫賃 ” ”	0.001	口縫賃 ” ”	
	0.001	引換證發行料 ” ”	0.001	進境稅 ” 哈洋	
	0.001	マーク刷込賃 ” ”	0.001	自治捐 ” ”	
	0.001	計	0.001	貨車卸賃 ” ”	
包装費	0.000	麻袋 連絡一車	0.000	麻袋 連絡一車	
	0.000	麻糸	0.000	麻糸	
	0.000	計	0.000	計	
	0.000	空袋賣却費	0.000	空袋賣却費	
製造費	0.000	差	0.000	差	
鐵道運費	0.051	東支運費 百斤に付	0.051	原料大豆(安達より哈爾濱まで)	
	0.044	同附帶費	0.044	一廾金留(地方換算) 一四八五	
	0.052	滿鐵運費	0.052	連絡一車に付 金留 四八五〇	
	0.043	同附帶費	0.043	三厘替金 三二六五 百斤に付	
計	0.148		0.148		
計	0.148		0.148		
差額	(-)		(-)		
差額	(+)		(+)		
差額	0.111		0.111		



埠頭費	輸出税	船運賃	海上保険料	豆粕缺斤代	計
第三八表に同じ	〇.五二	〇.五六	〇.四四	〇.〇六	三.六六
豆 粕 (哈爾濱より東行) 百斤に付 〇.七三					二.〇〇
豆 油 (同 南 行) 一〇.五斤に付 〇.三六					〇.一六
第三八表に同じ	三.七	〇.五六	〇.一六	〇.一六	二.六八
	(-)		(-)		(+)
	一.六	〇	〇.〇一	〇	二.六八

備考 哈爾濱油房鐵道運賃中原料大豆運賃に對する金留換算率は東支沿線及各驛相互間のみ用ひられる所謂地方換算率に依る現在 (昭和五年五月) 其換算率は一〇〇金留に付哈大洋一三〇元なるに依り之を金票に換算して一金留七三三厘とす、但此換算率は銀相場其他に依り常に變動す。

従つて現在哈爾濱油房の原料大豆中其過半数は西部線大豆を以て充たされて居る模様がある、前記第五表に示す如く近年東支沿線 (主として西部線) から哈爾濱に到着する大豆が相當多量に上りつゝあるのは右の事實を物語る證左と云へる、然らば何故に斯く有利となるかと云ふに夫れは西部線産大豆に對し東支が油房原料大豆特定割引運賃率なるものを定め、安達阿什河及哈爾濱の油房用として西部線各驛から右三驛に託送する大豆に對し其運賃を百斤一應當一留一四

五 (金票換算八二八厘) と定め他の賃率に比し著しく割安となして居る爲めである、今此賃率を大連油房が安達大豆を使用する場合に東支に支拂ふべき賃率即ち安達發東支南行運賃百斤一應當二圓四三二厘に比するに夫れは僅に三割四分に相當するに過ぎぬ有様である、従つて哈爾濱油房は大連よりも採算上夫れだけ有利となる譯である。  
次に右の哈爾濱油房と西部線所在油房との比較を見る爲めに安達産大豆を原料とする場合に於ける哈爾濱及安達兩地油房の採算を比較するに大體左表の通りであつて安達油房は哈爾濱油房よりも大豆百斤に付七錢内外有利である。  
(元) 安達産大豆を原料とする哈爾濱油房對安達油房採算比較表 (大豆百斤當)

費目	哈爾濱油房		安達油房		差額
	金額	摘要	金額	摘要	
產地諸費 (第三九表參照)	〇.〇〇	買付口錢 連絡一車金 口縫賃	〇.七〇 一.一〇 一.一〇		(+)
包裝費 ( )	〇.五五	麻袋償却費 三五〇袋 七錢替 金 三四五〇			(+)
製造費 ( )	三.九三	推定			(-)
鐵道運賃	〇.〇六	原料大豆 (安達より哈爾濱まで) 百斤に付	〇.〇六		
	〇.七三	豆 粕 (哈爾濱東行) 九四斤に付	〇.〇一		
		積込賃其他			



船運賃	( )								
輸出税	(第三九表参照)								
埠頭費	豆粕(東行) 豆油(南行) (第三九表参照)	0.10K 0.01K							
東支運賃			1.01K						
同附帶費									
烏鐵運賃									
同附帶費									
計									
豆油(東行)									
積込賃其他									
東支運賃									
同附帶費									
烏鐵運賃									
同附帶費									
計									
豆粕(東行)									
夏百斤に付									
冬百斤に付									
計									
哈爾濱油房に同じ									
計									

海上保険料	( )								
豆油缺斤代	( )								
計									
豆粕(東行)									
豆油(東行)									
夏百斤に付									
冬百斤に付									
計									
哈爾濱油房に同じ									
計									

斯くの如く西部線油房の方が哈爾濱よりも尙一層有利となるのは何んの爲めであるかと云ふに其主因は豆粕及豆油の章に於て述べた如く西部線から東行する豆粕及豆油に對し可成りの運賃安の特典あり夫れが哈爾濱油房に對する右の特典よりも採算上一層有利な効果を來す爲めである、併し

(イ) 西部線各驛は其出廻大豆の量に於て哈爾濱に及ばず且此地方には哈爾濱に於ける如く所謂河豆の出廻殆んど皆無なるに依り出廻期間も長からず原料大豆の購入上諸種の不利あること。

(ロ) 油房の製品たる豆粕及豆油は北滿に於ける中心市場たる哈爾濱に於て多く取引されつゝあるに依り販賣上にも西部線は哈爾濱に比し不利あること。

(ハ) 油房製品中豆油は近來歐洲向割合に少く南滿、南支向又は地場消費多く此等の需要に對しては西部線油房は採算上歐洲向程に有利でないこと。

等西部線油房にも諸種の缺陷あるに依り實際上に於ては哈爾濱の方が概して有利となる様である、既述の如く哈爾濱







14.5  
174



終